

1971

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十三年十月十日發行(每月一回十日發行)

永樂町人編輯



十月號

【號八十六第】

新しい建設の秋に際しまする何方もの脈
搏には明るい希望——強い力——快よい
活動の血汐が躍つて居ります。

晴れやかに靜かに落付いた心持にあけ
び紫、うす珊瑚、瑠璃孔雀、河千
鳥、今年竹など流行の基調色妙用をし
て線と色との新しい美しい世界を作つて
居ります。

それが私どもの秋向新製品として御鑑賞
を御願ひする次第で御座います。

殊に相場を度外視した安い値段が何ん
と云へぬ強味で御座います。

菊に紅葉に七草に交ゆる新柄の數々是非
御清覽の程願上ます。

株式會社
三井吳服店



京城雜筆拾月號執筆者

(大體原稿到着順)

副島 道正	(京城日報社長)	明治神宮參拜記	(一)
寺尾 猛三郎	(龍山寺尾組)	擔板會	(三)
時實 秋穗	(京畿道知事)	物眞似國	(四)
内田 竹三郎	(旭町銀月主人)	吾輩の玄關番時代	(五)
木戸 虎藏	(木戸齒科醫院長)	キツス有害論	(六)
新田 耕市	(新田株式店主)	不景氣論	(七)
名村 寅雄	(大阪毎日支局長)	大阪毎日	(八)
足立 丈夫郎	(京畿道評議員)	諸戸清六翁行狀記	(九)
橋川 克彦	(京城郵便局長)	旅行漫筆	(一〇)
森 六治	(京城鐘路署長)	米のなる木	(一一)
芥川 正	(釜山日報社長)	病閑漫筆	(一二)
西崎 鶴太郎	(鎮南浦實業家)	破呂溫泉遊記	(一三)
中島 司	(殖銀調査役)	壽町の家	(一四)
麻生 晋波	(麻生鑛業會社)	還曆に際して	(一五)
櫻井 小一	(殖産銀行重役)	漢江雜記	(一六)
工藤 武城	(京城婦人病院院長)	讀東湖正氣の歌	(一七)
篠田 治策	(李王職次官)	加藤清正と間島	(一八)
弓削 幸太郎	(總督府鐵道部長)	休養の説	(一九)
福田 有造	(木浦實業家)	旅	(二〇)
小瀧 元司	(久原鑛業京城事務所)	馬上醉吟行	(二一)
深尾 道恕	(殖産銀行理事)	謠の話	(二二)
守屋 徳夫	(殖銀秘書役)	海樓漫筆	(二三)
伊藤 韓堂	(朝鮮語研究會主幹)	朝鮮語の日本化	(二四)
野崎 眞三	(朝鮮新聞社會部長)	性と性慾に關して	(二五)
別府 八百吉	(京城日日理事)	追憶一	(二六)
中村 巖	(安取監査役)	銀寶買の話	(二七)
川上 健	(大日本麥酒出張所長)	行雲漫筆	(二八)
今村 鞆	(李王職庶務課長)	草の花	(二九)
桑野 健治	(朝鮮信託常務)	太刀魚を拾ふ男	(三〇)
佐藤 作郎	(滿鐵旅客係主任)	金剛山漫筆	(三一)
飯泉 幹太	(鮮銀庶務局長)	鱸釣らざるの記	(三二)
安東 貞一郎	(安東病院院長)	京城女流俳句	(三三)
加藤 松林	(東洋書家)	松本先生	(三四)
廣江 澤次郎	(奉天實業家)	仲秋節の夜	(三五)
山口 太兵衛	(商業銀行重役)	京城昔話	(三六)
坪内 孝	(第一高等女學校校長)	京城みやび會歌聲	(三七)
永樂 町人		生活斷片	(三八)
			(三九)
			(四〇)

(其他社友數氏執筆)

新しい建設の秋に際しまする何方もの脈
搏には明るい希望——強い力——快よい
活動の血汐が躍つて居ります。

晴れやかに静かに落付いた心持にあけ
び紫、うす珊瑚、瑠璃孔雀、河千
鳥、今年竹など流行の基調色妙用をし
て線と色との新しい美しい世界を作つて
居ります。

それが私どもの秋向新製品として御鑑賞
を御願ひする次第で御座います。

殊に相場を度外視した安い値段が何ん
と云へぬ強味で御座います。

菊に紅葉に七草に交ゆる新柄の數々是非
御清覽の程願上ます。

◆ 株式會社 三井吳服店



京城雜筆拾月號執筆者

(大體原稿到着順)

副島 道正	(京城日報社長)	明治神宮參拜記	(二)
寺尾 猛三郎	(龍山寺尾組)	擔板會	(三)
時實 秋穂	(京畿道知事)	物真似國	(四)
内田 竹三郎	(旭町銀月主人)	吾輩の支那番時代	(五)
木戸 虎藏	(木戸齒科醫院長)	キツス有害論	(六)
新田 耕市	(新田株式会社主)	不景氣論	(七)
名村 寅雄	(大阪毎日支局長)	大阪毎日	(八)
足立 丈夫郎	(京畿道評議員)	諸戸清六翁行狀記	(九)
橋川 克彦	(京城郵便局長)	旅行漫筆	(一〇)
森 六治	(京城鑛路署長)	米のなる木	(一一)
芥川 正	(釜山日報社長)	病閑漫筆	(一二)
西崎 鶴太郎	(鎮南浦實業家)	破呂溫泉遊記	(一三)
中島 司	(殖銀調査役)	壽町の家	(一四)
麻生 音波	(麻生鑛業會社)	還曆に際して	(一五)
櫻井 小一	(殖産銀行重役)	漢江雜記	(一六)
工藤 武城	(京城婦人病院長)	讀東湖正氣の歌	(一七)
篠田 治策	(李王職次官)	加藤清正と間島	(一八)
弓削 幸太郎	(總督府鐵道部長)	休養の説	(一九)
福田 有造	(木浦實業家)	旅	(二〇)
小瀧 元司	(久原鑛業京城事務所)	馬上醉吟行	(二一)
深尾 道恕	(殖産銀行理事)	謠の話	(二二)
守屋 徳夫	(殖銀秘書役)	海樓漫筆	(二三)
伊藤 韓堂	(朝鮮語研究會主幹)	朝鮮語の日本化	(二四)
野崎 眞三	(朝鮮新聞社會部長)	性と性慾に關して	(二五)
別府 八百吉	(京城日日理事)	追憶一つ	(二六)
中村 巖	(安取監査役)	銀賣買の話	(二七)
川上 健	(大日本麥酒出張所長)	行雲漫筆	(二八)
今村 靉	(李王職庶務課長)	草の花	(二九)
桑野 健治	(朝鮮信託常務)	太刀魚を拾ふ男	(三〇)
佐藤 作郎	(滿鐵旅客係主任)	金剛山漫筆	(三一)
飯泉 幹太	(鮮銀庶務局長)	鱸釣らざるの記	(三二)
安東 貞一郎	(安東病院長)	京城女流俳句	(三三)
加藤 松林	(東洋書家)	松本先生	(三四)
廣江 澤次郎	(奉天實業家)	仲秋節の夜	(三五)
山口 太兵衛	(商業銀行重役)	京城昔話	(三六)
坪内 孝	(第一高等女學校長)	京城みやび會詠草	(三七)
永樂 町人		生活斷片	(三八)
			(三九)
			(四〇)

(其他社友數氏執筆)



明治神宮参拜記

京城日報社長 副島道正

私は家族を伴れて、正月元旦と、一月三日と、それから七月三十日とには必らず明治神宮に参拜することにして居ります、尤もその他特別の場合には勿論参拜致しません。ところで昨年十一月三日と本年の一月一日とは、彼の大震災の後でありますから参拜者の数はどうであろふかと實は思はれたのである、しかし事實は例年よりは多いことは無かつたけれども、また決して少くなかつたのである、取りわけて一月元旦などの参拜者はあの厳びしい拂曉の寒気の中を朝の四頃時からつめかけてゐる、そして御門の開らくのをまつて居る私の家族を伴れて参拜したのは何でも午前の十時頃であつた、靜肅ではあつたけれども驚く程の参拜者で充滿されてゐた、のみならず震災後のことゝて國民を擧げて敬神の念は層一層と深められ且つ強められたのである、中の鳥居を進むとき後方より新しき揃ひの法被を著た五六人の一團が來た、その中の一人の法被を見ると清潔社の印が眼につく、清潔社と言へばもつとも尾籠な仕事に働くものである、それ等の面々がいかにも清々しき新しき揃ひの法被姿で神宮に参拜して恭しく拍手を打ちて拜禮を

部鑄び六时砲も狂つたと思ふ、また照準器も狂つたやうである。但し軍艦が儼然として浮んでゐるのは國民ことに中流以下の者がまだ敬神の念が熾烈であり眞面目であるからである——清浦首相は之に對して、憂國の至誠より述べた議論は大に傾聴する處であると答へたのであつた。中流以下の者——中流以下の人々——私は中流以下の健全なる分子がますます健全ならん事を切望するものである。これ茲に明治神宮参拜記と題しその感想の一端を綴つて敢て一文をなす所以である。

したのを見て私の心は深く感に打たれたのである、斯かる一種の感激と敬虔とそして敬神にみちた光景のなかにひたりながら、歸りに表の鳥居に近よる時分不圖私は廿年前につまらぬ或る雑誌につまらぬ願の下に一つの俳句があつたことを憶ひ出したのである、題は釘といふので『國ももる軍艦も釘の力かな』といふのである。全くであります、堂々として海を壓する軍艦と雖も釘の力に依つて固められてゐるのである。眞に以て意味深長な俳句である。ソレで時恰も○○○○○思ふに日本の克く國體の精華を發揚してその昌榮とその強きを致して居るのは忠良なる國民を有する日本の社會が儼然として今日存して居るが故である。要するに下級換言すれば一般國民の敬神の念が少くともその大なる一素因であらうことを信じて疑はない、その日の参拜者の人々は、至つて僅少な——數人を除くならば悉く中流以下の人々であつたのであります。その後私は、一月廿五日の貴族院議院に於て清浦内閣に質問するに當つてこの事を述べたのであつた——日本帝國を軍艦に比して例へば十六时砲も大

◆ 總監と將棋

吉田 莊一

下閣政務總監は、將棋が好きだといふ評がある▲ドレ位の技量かといへば、高橋章之助辯護士位といふ是れも噂がある▲果してさうだとすれば、素人としては相當強い方である▲京城の棋界も最近不振萎靡に陥つて居るから、何んでも之を機會に大に再興したいものだ▲前の政務總監はゴルフが好きでそれが爲めに總督府の大官連、民間の名流は争つてゴルフに走つた▲今度はあの連甲をそつくりその儘、將棋の方へ失敬したいものだ、これもさる棋狂の怪氣焰▲それから三矢警務局長は、大の刀劍道樂、それも書生時代からの趣味だつたといふ、刀劍趣味は少し減吹したいもんだ。

擔 板 會

龍山寺尾組 寺尾猛三郎

九月十三日恰かも觀月の好期節、
塲所は眺へ向きの鷺梁津月波亭に
第四回擔板會を開く。月番幹事は
斯く申す公天なり、名稱自詮の擔
板漢揃ひとして何んの猶豫もなく午
後の一時を合圖に平野天桂師を先
登とし、時實、米山、工藤擔雪、
佐々木桂屋、墨澤桂山、大石兩山
坪内桂洲、深川桂南の諸氏、少し
俛れて橋本桂堂、深尾桂霞、櫻井
桂屋の三子、最後に松寺桂陵、齋
藤物外、安藤老泉、池田桂鳳の四
子來著す。其他女子連を卒ひて席
上を發旋せる工藤桂光、寺尾桂彩
兩女史の光彩を添ゆるあり。殊に
月波亭主人荒井初太郎君の好意と
遺憾なき手配は月番幹事の足らざ
るを補ふて尙ほ餘りありと云ふべ
し、一同は先づ別室に陳列せる天
桂師の描かれたる松葉の屏風並に
荒井氏珍設の翠雲、露伯の屏風及び
各名家の筆に成りたる新古書畫を
鑑賞し、其れより抽籤に因り席畫
を試む、第一番は幸か不幸か米山
先生なり速やかに舟と月を畫く、
誰れか造作もなく出來たねと皮
肉れば、どうじや最も季節に適し
たるものじやろ、との自贊を手始
めに順次描き去り描き來る何れも
進境の著しきものあり、雪荷を御
したる米山子髭を捻り上げつゝ寸
評を試むれば其處にも此處にも悲
鳴を擧ぐるあり氣焔を吐くあり席
上漸く物騒なり、桂洲子簞と笠を
描く米山子一見何んじや君は海月

を描くのかと擲擲一番す、桂洲子
對へて曰くハイ私は海月を描いて
居りまする、一同噴き出す。桂洲
子は柔能く剛を制するの術を知れ
るもの乎、悪口では人に劣らぬ桂
霞子、米山子に一矢を酬ひて曰く
君は十年の稽古で棒を一本描くと
の噂さだか此頃丸いものも描くの
を見れば弱かに天桂師に學んでる
など急所を衝く、畫論に没頭する
こと三十年歸省の際は六曲屏風を
描いて田舎者を驚かしたと氣焔を
擧げたる桂屋子は包圍攻撃に陥り
てあの事は言はなければ好かつた
と白旗を掲ぐ、一同凱歌を擧げて
喜ぶこと子供の如し、桂霞子牡丹
を描く評するもの曰く墨色が好い
ねと、氏曰く褒めて呉れるな前回
にも馬鹿に墨色の評判が好かつた
が投票の蓋を開けて見れば一票も
無かつたと飛んだ處で不平を洩ら
す。老泉子は拜觀仰せ付られたる
客と稱して揮毫を肯んぜず公天躍
鬼となりて説破す曰く素より衣冠
束帯を搔投り捨てた雅會ではある
が天桂師と月當番には絶對の命令
權があると、老泉子諾しと許りに
竹を描く筆勢見るに足る、桂風子
及び桂光、桂彩兩女史も月當番の
事績を叫びながら遂に描く、互選
の結果南山子十二票を得て一等と
なり、桂屋子と桂光女史は各十一
票の同點なり依つて兩人を二等と
し、七票の公天無理に三等に割込
む。前回に三票の得票ありて今回

一票も無かりし人あり、或人慰め
て曰く其れは君の進歩した何より
の證據だ初めは幼稚なるに同情し
た票あり今度は一人前の畫家とし
て認められたる爲め得票なし、選
に入るは素より名譽なれど選に入
らざるも亦名譽なりと、一向論理
に合はぬ議論をなし、之れ擔板會
の本領を發揮せる所なりなどと煙
に巻きつゝ、各自浴室に赴き牛乳
風呂に一浴を試む。浴場は亭中最
も絶勝の位置にあり遙かに漢江を
隔て、二村洞及び麻浦を望めば北
漢山は其背景となり眞に畫も及ば
ず。心身爽快各男振りの上がった
るを疑ふ、其れより寄せ書きを了
り六時頃宴を開く警澤なる料理を
野趣に包みて風雅を味はしめたる
は蓋し荒井氏苦心の存する所にし
て獻酬數刻歡を竭し、月下に人影
を踏んで各歸途に就きたるは夜正
さに十時を過ぐ。

月波亭席上口吟 平野天桂
笑迎玉女出雲來。亭號月波江上臺
詩意畫情兼可毒。夜深更識興逾催
同 次韻 工藤擔雪
風涼玉甕蹴波來。江上秋高觀月臺
飽賞清光豈可毒。何妨痛飲曉鐘催
同 同 寺尾公天
嫦娥皎々照筵來。笑消南山是鏡臺
今夜不禁驢客興。月波亭裡畫情催
同 同 松寺桂陵
天高鴻雁帶秋來。玉露金風滿水臺
月出山頭光入座。桂花香處筆華催

五龍背から

權 藤 九 洲

國境の新涼を趁つて南滿の一角に
入り、只今五龍背の温泉に浴し居
り候、亦た閑人の一閑事に之有候
(九月一日)

物 眞 似 國

京 畿 道 廳 時 實 秋 穗

【 田 】

國を開いて七十年、其の間に世界のあらゆる文化を我物にしたと感張つて居る一面、他國の者からは猿の人眞似に過ぎぬと云はれて居る、自分で創造せねばならぬ立場に居る我識者達が、如何にも其の通り、物眞似は上手だが創造の能力には缺けて居ると御丁寧に裏書して居る、而かも我れこそは世界の大學者大物識と云ふ態度で、相變らず人の請買ばかりして居る、考へて見れば癩でもあり、又遺憾千萬である。

亞米利加が英吉利に五年も居つた人は、語學の達人のやうに考へられる、自分もさう任じて居る、然し未熟な我々が聞いても分るやうな演説の通譯にさへ、時々如何はしい人がある、大體を通じて見て如何に上手な日本人の英語でも相當分る、然し何うも英米人は聞き難い、それだけ日本人のは日本式で、洗練の足らぬ所があると思ふ、結局物眞似は物眞似で、本物と競争の六ヶしいことは之でも分る、西洋の文化が何うの思想が何うのと云ふて見た所が、先づ震を隔て、お日様を見るやうのもので大體からは依然として請買たり物眞似たるに過ぎぬ、此の有様で創造力の競争はちと責める者に無理があらう、責められる人も嘆苦しからう、殊に一番苦しからうと思はれるのは、何でも西洋のことも云はぬと物識でないかのやうに

考へられる爲に、及ばずながら其の方の模案に精力の大部分を費して、何々氏曰く何々博士曰くと大家の名前を並べねばならぬ大家達であらうと思ふ、御苦勞千萬なにとぢや。

自分の世話になつたことのある東京白山の龍雲院に居られた渡邊南隱禪師は、明治佛敎界の大立物であつた、其の當時之も一方の大立物として、眞宗に行誠上人と云ふ方があつた、此の南隱禪師と行誠上人との相見の模様を、之も私に縁故のある高等學校時代の教師であつた野々村文學士が書いて居られる、それは南隱老師が行誠上人と相見せられた後で、淨土門の人に話された言葉に「俺はナア和主が方の行誠さんに遇ふたことがあるゾイ、どの位淨土の門を噛みこなして居られるか、夫れが見たうてナ、ジャが行誠さんは禪で來られたじや、行誠さんがいくら偉ふても禪なら俺の方がイヤイ、喃」と云ふのがある、面白いと思ふ、淨土門の人なら淨土門で行つたがよからう、禪の専門家に禪で行つては先づ勝味はなからう、殊に身を淨門に置きながら、他流の禪で行くのはちと何うかと思ふ、野々村先生もさう云ふて居られる、此の評も最近に『淨土敎批判』を書いて宗門内で問題になつた先生だから、かく評せられたものだとのみは思はれぬ。

西洋文明は行詰つて居る、東洋思想こそ今後の研究題目であるであらうと云はれて居る、成程それも

其の等、東洋思想の源泉である佛敎や佛敎は何處へ出しても立派なものである、近頃歐洲の學者達の思想中、佛敎や老莊や儒敎に根柢を置いて居るものは少くないと云はれて居るそれに我國の多くの人は、何處迄も歐米の洗禮を受けたものでない、と雖有味が薄いとでも思ふのか、相變らず西洋の名前の付いたものばかりを擔ぎ廻つて居る、其の他各種の方面に亘つて、歐米人の手の著かぬ而かも我々として研究思索の上に特別の便宜を有つて居るものを度外視して、何時も後塵を拜することばかりに汲々として居る觀のあるのは遺憾である。

近頃見た人の著述、相當我國民性とか國民道德とかに馴染のある人の著書の中に、これも時代の風潮に阿ねるものか、さもなければ自己の脚下を知らぬのかも知れぬが、連りと平等は耶蘇敎から起つたの博愛は西洋物だと云ふて居る、考へて見れば、平等觀や博愛觀は少くも我々が日常親むて居る佛敎の大理想ではないか、或は耶蘇などよりはもつと徹底して居るかも知れぬ、平等を考へて照平等に墮したり、博愛を唱へて我利之念とする國々に比べて見れば、之も此の方が本家だと云ふて差支なからう何から何迄天才のない國、本家本元ばそちら様と片付けて、一向すれば出来る創作に努めぬのは餘りに意氣地ない行方ではなからうかちと照顧脚下の必要があらう、眞實ないものは請買物眞似も仕方ないし、何處迄も自家の領分だけでよいと云ふのでは勿論ないが、少くも『幾ら偉ふても淨門は淨門、一禪なら俺が方で喃』位の見識はなくてはなるまい。

吾輩の玄關番時代

旭町一丁目
「銀月」主人
内田竹三郎

◆天下國家を茶盆にのせて、吹飛ばす位は、朝飯前の尋常茶飯事程にも、思つて居らぬ積りの我輩も其希望と現實との距離が、地球に近づいた火星の距離よりも更に、チヨツコン遠いとありては、我れ乍ら前途大に遼々迢々の嘆なきを得ぬ次第。

◆而も朝鮮に來て茲に、二十年、依然たる吳下の舊阿蒙、不相變資中有閑の窮措大、知友嘲けりて云ふ、何等の前途ぞやと、全くそうかも知れない、只頑健強情、生命のある中は、死なぬものと曼如たる處に、自分自身を鞭撻しつゝ、楽しんで居る阿呆らしさ。

◆之れから、ソロ／＼位に考へつゝある我輩に、もう昔課の材料を持つ様になつたと思ふと、鏡に向つて大に自己を叱咤せざるを得ぬ次第である。

◆それは自分が佐野(常民)伯爵家の支關番時代のこと、小倉袴からフロックにも著替へ得る迄の歲月、二松學舎、農林學校、露業試験場、早稻田と轉々する、西ヶ原の露業試験場時代は、王子の龍の川に面した閑靜清淨の八疊間で、下宿料月三圓六十錢、一日三飯十二錢也の時代だから、聊か隔世の感なき能はずすな。

◆其當時は伊東己代治氏と平山成信氏が内閣と樞密院を交互に書記官長した時代で、伊藤博文(伯爵)松方正義(伯爵)兩公が内閣を組織しつゝあるの時、何時も内

閣瓦解と共に、ウチの阿爺(佐野伯)が産婆役として、飛廻はる、我輩が亦必ず革靴持ち、阿爺は足の一本が短いから、どうしてもお伴が入用と云ふ譯で。

◆四方拜や天長節其他大祭祝日に二重橋を経て參内する時はやはりチャツプリン式前代書生の著古した、燕尾服を襲用して、シルクハット白手袋と云ふ、今から思ふと随分可笑しくもある、賢所へなども七八回お伴して居る、馬車馬でも、二重橋を隔ける時は、嬉しいと見へて、勇みに勇んで、之れが本當の勇躍と云ふのであらう、全くの車聲々々で晏子の御者ならなく、兵士に捧鉢されると、何だか自分がされる様な氣がして思はず帽子に手が掛る、變なものさ

◆畏れ多くも、今上陛下、まだ皇太子の御時、我郷里、栃木縣の唐澤山へ三度行啓在らせられた、唐澤山神社は別格官幣社で、祭神は阿爺等の祖先、田原藤太、藤原秀卿公で、明治十四年故城址を修理し修飾し、築造して、山地は御料地に編入せられ、有名なる松茸は皇室の御料に供せられ、夫れ以來年々、貴紳の登山するもの數限りもなく當時春秋兩季には東京は勿論近縣から學生其他の團體が毎日千人二千人も登山すると云ふ勢ひ。

◆陛下御十一歳、始めての行啓の御時、四人の御學友と、山腹の稍急阪なる邊り、無數に松茸のある

地點に御徒步にて入らせられ、供

奉員の外は、佐野伯、當時の栃木縣知事佐藤暢氏、宮司佐野卿及我輩のみお伴申上げた、然るに供奉員等も餘りに澤山の松茸に氣を取られて我先きにと自身等が先づ茸狩に夢中になる、御敏活なる殿下には稍御同年輩の御學友と、最先に早足にて縦横に、御駆け廻り在らせらるゝ、御學友には夫れ／＼小さい茸籠を背負ひになる、瞬く間に、籠は一杯になる、内に一人(多分小笠原子の令息の)一番小さき御學友は、背の重みに堪へ兼ねて中々、殿下や他の御學友と一所に進めないで、能くコロブ、コロブと松茸が半分は、コポレル、殿下には、それを見せなけりて、佐野々々とお呼びになるが、阿爺は跛で、杖を力といふ有様、且つ亦供奉員の餘りに傍りに御近付きなさるを、お嫌ひなされて、可成遠く遠くと離れて、御駆け廻りになる、中々阿爺の足などの及ぶべくもない(無論二三十間位離れて供奉員はお護り申してはあれど)ハイハイと返辭はすれど、及ばぬ、今度は知事々々と仰せある、佐藤知事も亦體量廿四貫と云ふ大男、これ亦敏捷なるお小供方の御健脚に及ぶべくもない、喘ぎ／＼お伴申すが一生懸命と云ふ有様、末遂に一番御近くに居りし、我輩をお指しなされて『佐野の々々々』と仰せある、急いで御近づき申上げると、之を持ってとの御事、まさか子供に子供の様に背負もならず、遠くに居る看守や、案内人に、持てと云ふのも、不敬、今度はコツチが汗ダクで、六十町ばかりの區域を縦横に一杯の籠を掲げて、蹶足の御學友と共に行動するさ云ふ、恐懼すべき受辱の事もあつた。

キツス有害論

永樂町二
齒科醫院

木戸 虎 藏

歐米と我國と反對であつたらいろんな面白い事があるでせうと思ひます、何事でも輸入されたものは有難い世の中ですから——過去及現在に於ては——

キツス

何といふ醜態でせう！何といふ野蠻なぞして非衛生な行爲でせう！日本人はどうしてこんな習慣を有する事が出来ないでせう、吾々は多少し意志強く悪習は打破して行かねばなりません、歐米の男女は夫婦でさへ人の前で手をとる事を遠慮する位行儀がいゝのに我國ではどうでせう、公衆の前でも親の前でも一切構ひなしにキツスでも拘擁でもやります、丁度犬や猫がやるのと同じ様に。

それだけならまだだ、彼地の人々に耻しく思ふに過ぎませんが一度衛生上の見地から見ましたら坐る膚に粟を生ぜざるを得ません。吾々の皮膚一平方メートルの面積に附着して居る細菌の数は幾何でせう、一滴の唾液の有するパチルスの種類は幾百千でせう、勿論その全部が病原菌ではありませんが恐る可き終種傳染病菌のあることは言ふ迄もありません、それが日に幾度か手より口に、口より口に移されて居るのです、お互に細菌のなすりつこをやつて居るのです、思はざるも甚しいではありませんか、その無智あはれむ可きではありませんか。

我國は肺結核の國として定評のあるのは誰も知つて居る筈であります、キツスの廢止によつて救はれる患者の数は決して少くはありません、各種の施設が結核の撲滅の爲めに行はれて居るのに此のキツスを等閑に附して居る國民及政府は一體何を考へて居るんでせう

女

私共が歐米人の生活を知るに當つて感心するのは彼地の婦人の貞淑なことであり、何事も夫に従順であつて常に家庭にあつてよく家政を修めよく父母に事へ、子女の教養につとめて居ます、一つの家庭が二組三組以上の夫婦と十數

人以上の人々によつて組織される事は珍らしくありませんが斯くの如き人藝に依つて營まれる家庭生活は主として婦人に依つて其の平和が保たれるのであります。

男女！生れながらに其の何れかが優越な地位に立つといふことは不自然なことだと思はれますが然し兩者が何事も平和に仕事を辛棒することは六ヶ敷くはないかと思はれます、體力に於て女子の劣つて居ることは一般の認める處でせう、生理的に月經とか妊娠とかの現象を有することを如何せんやではありませんか、即ち天は男女なるものに與ふるに各異れる本分を以てしてあると思ふことが出来ます、此の事は自然界一鳥一獸に學ぶ事が出来ませう。

即ち男子を主として女子を従とした生活組織は天意に従ふものであつて我國のお轉婆な、出張張りな御婦人達は歐米の婦人を範とされ度いと思ひます。

◆夏帽子異聞

平田 久 雄

これは極近ごろの話だ、有賀殖銀頭取が或る日或る人を訪問すべく御自身の帽子をとると、誰れか來訪者に間違へられて居る▲念のためにかぶつて見ると、ヨホド頭の小さい人の帽子と見へ、頭取の頭の上でスットン／＼ダンスでも踊りさう▲當惑した頭取秘書室に這入つて來て事の次第を物語ると、大に同情した守屋秘書役「然らば私のお間に合はせなさい」……擲出に及んだのは、例の著名の古帽——二百年前和蘭國から我國へ輸入したといふ履歷付時代物——

▲頭取これには聊か當惑したがかぶつて見ると鏡俵にも寸法が小さい、やれ助かつたと思つて居ると、守屋氏重役室から森理事のを借つて來る、頭取「そいつは大きなあ、誰れのかね」「森さんのです」「道理でつかいと思つたぞれ／＼」かぶつて見ると、スツボリと鼻の下まで、それこそキレイに没入する、一同吹き出す▲そこへ當の森理事ぬツと顔を出し「何んだ／＼、これは怪からぬ、諸君はヒトの帽子をかつき出して、見れば寄つてたかつて嘲笑護侮、これは近ごろ心得ぬ」言ひ／＼大事さうに件の巨帽を巨頭へ、そろツと載せたので一同亦た大喜び。

不景氣論

新田仲買店 新田耕市

眞實復興の機運に向ふのである。

事業をするにも商賣をするにも餘程慎重でなければならぬ事が痛切に感じられ、それでなければ結局自他共に危険である事が會得せられた事であらう、又職業難、失職難の加はると共にそこに初めて勤勉努力の氣風が起るのである。

物は考へ様一つに依つて苦ともなり樂ともなる、裸一貫で奮闘する覺悟さへあれば此財界不況のドン底も又春風飄蕩の曙光は認め得る否茲に初めて不景氣の有難味……實力、勤勞の眞價を體得し得るのではあるまいか。

であるけれ共又一面靜に考へて見ると此不景氣の爲に好いことも弗々芽ぐまれて居る様にも思はれる

それは一時輕薄に走つた多くのあらゆる成金をして少くとも過去の放埒不謹慎を悔悟せしめ其所に多大の教訓を與へたこと、又一般社會が浮華からマジメになつたこと……此氣風が現はれてこそ初めて

◆本町一夕話

中村蜻堂

本町昔話を書くのに漏らしてはならぬ事が二ツ三ツある。

今京城の銀座として時めく本町の入口京城郵便局のある場所の邊は其の昔竹藪であつて此邊から織んに強盜が出没したものであるをうな、今は文明の粹を蒐めた。

電信電話の本場となつて、宏壯なる赤煉瓦の窓からは時折り電話姫の奏する、ピアノやオルガンの妙なる音律が遠りに漂ふてゐる。竹藪の強盜と比較して考へて戴きたいものである。

それから今の本町二丁目の眞ん中に『日本橋』と云ふ橋があつた、今は綺麗なアスファルトで補装されて一面の鏡の様な路面になつてゐるが其の昔『泥鰌』と稱した時代には内地人の爲めには何となく懐つかしい名前の『日本橋』と云

財界の反動的非況に際會するや多くの船成金、鑛山成金、株成金、貸成金(特に京城に多し)は運輸閉散、經營困難、整理暴落、回収不能等にて秋の木の葉を散らすが如く唯だ譯もなく地上に叩き付けられた。

それは何の事はない夢を見て居る様なもので金銭を湯水の如く散じ一夜大盡を氣取つた他愛もない反動であつたが現實の壓迫はヒシヒシと彼等を見舞ひ遂に天の試練は昨年の大震大火となつたのである

財界の不況は遂に一般の購買力を著しく衰退せしめ金の値打は減切り急くなつて國民は擧げて節約を叫び、戰爭前後に甚しく膨脹せられたあらゆる生産事業は遂に不況に陥り俄に倒潰、整理、縮少せらるゝに至つたのである。

物を賣つて金にしようとの觀念は非常な速度で世人の頭腦に感じ、新規の買物は手控へらるゝに至るから益々物の荷捌きは悪くなつて生産者と商人は非常な窮境に陥らねばならなくなつた。

斯くの如き不景氣の襲來は都鄙を通過し投げ與へられて居るのであるから全く吾等は厭ふべき呪ふべきもので寧ろ感謝すべき所はない様

ふのがあつた。

今でも其の位置は龜屋の隣に依然としてあり落ちついて歩けば、此處だなど、思はれる場所がチャンと残つて居る。

も一つの橋は本町四丁目と五丁目の間にある、橋のある事だけは大抵知つてゐるが、それでも知らぬ者は知らぬ、あれが有名な思案橋といふ奴で此處まで行つたら一寸二の足を踏んで先きの方を案じたと云ふ物騒な淋しい所であつたださうな。

當時の内地人は極少數な男子ばかりであつたのださうだが、

其頃、今の古城梅溪さんの附近に内地人の母娘二人で菓子店を開いたものがあつた、ところが其の娘が丁度年頃だと云ふので、一般の野郎は勿論のこと、領事館や公使館の相當な位置にゐる人達らまでが競ふで、欲しくもない菓子店を能く買に行つたものだとは痛快。

大阪毎日

大阪毎日新聞
京城支局長

名 村 寅 雄

松本さんから『大阪毎日の話』
を書けとの注文が来た、にんを
見て法を説かれた形ち。では一
つ自慢させて頂か！。

◆
試みに一夜、大阪梅田驛頭にソノ
瞬間を佇立して見やうか、腹に、
大毎の星マークを帯にした十噸貨
車位の大自動車が『大毎』をグ
ラ／＼と積んで目まぐるしく去
來する、すると東西南北へ幾十か
の列車は瞬く間に新聞腹に成り了
せて眞つしぐらに馳驅し去るであ
らう恐ろしく慌しい、ゴ／＼一時の
光景を眺めた刹那、佇立者のあた
まは何の躊躇もなく『大毎の百萬
突破』を肯定して仕舞うであらう

◆
大毎百十五萬、東京日々七十萬、
合して二百萬、『日本一』は昔の
こと、今や世界的にのし上げたこ
の日本新聞の超越的名聲は、われ
等の自慢といふ如うなそんなチケ
臭い、小さいものではなくして、
日本文化の一大誇りではないか、
ここに始めて新聞發達の意義を發
見する。——朝つばらから夜つび
て、例の二時間七萬二千枚を刷り
あげる高速度輪轉機が、一大瀑布
の不斷の落流のやうに、轟々の音
をたてゝゐるではないか、この轟
音の中には正しく、われ等新聞記
者の生命が躍動してゐるのだ、一
日の使用紙をひつぱり廻すと世界
一周が、らくに出来るなどは、何
と豪壯な、日本文化進轉の一大表
徴ではないか。

◆
大毎、東日、社員合して二千五百
世界を家に躍動してゐる、この總
頭領本山彦一翁——恐ろしく偉大
な氣魄を蔵して、大毎社長として
の二十年、遂に今日の『大毎王國
』が形成された。一度ひ羽はたき
をしたら、大鷲のそのやうでも
あらう、と思はれる、が然しわれ
等は慈父の如き翁を見て、未だ尙
ほ羽ばたける翁を見ない。七十二
歳猶壯者を凌ぐの剛健は、翁の
左の一詩にも窺へやう。

九抵朝鮮三瀟洲。再作滄國汗漫
遊。今夏避暑入威府。一轉歴覽
沿海洲。長白山陰積朔雪。黑龍
江洲生涼秋。戰車廿日無人地。
濯足萬里滄溟流。老來耽樂君休
笑。一片猶存天下夢。

◆
イルタークに避暑するなどは、
翁が別荘を還附後の青嶋に開いた
と共に一寸幅が廣いではあるまい
か。節酒二十年禁酒十年、禁煙十
年、減食、運動、夜間腹糞、冷水
浴これ我養生法也と翁は若いわれ
等を説く、恐ろしい克己力ではな
いか、東西二千五百の社員は翁の
この豪傑な氣魄に引き伴れられて
確乎不拔の、大毎スピリットが、
上下三千社員の血の脈を一貫して
流れてゐる所、大毎王國の一大雄
魂であらねばならない、あゝ『大
毎スピリット』それは、われ等若
き新聞記者の渴仰の的ではないか
◆
『人の和』も大毎を今日に到らし
めた所以ではあるまいか、童務の

高木、桐原兩氏や主筆の高石、城
戸兩氏主事の奥村、松内兩氏など
本山翁子飼の當千の士、況んや三
千社員がその手足の儘に『戦線』
に立つのだ、彼れの覇業成る又宜
なりでないか、不偏不黨も不羈獨
立も、斯かる搖ぎなき礎の下に築
かれたのである。あゝ尊ぶべき不
羈獨立！嘗て我が社長であつた
故宰相原敬氏は氏が伊藤公に招か
れて政友會立黨委員たる爲め大毎
の此不羈獨立から退いたのである

◆
支出經費一ヶ年二千萬圓、朝鮮の
地方費總額と同額である、獨壇的
に光る、大毎の外國特電に費す額
だけでも大したもの、内地の重大
事件でさへ、關東の大震災には五
十萬圓を費した——貧困者無料診
療の巡回病院、講義や活動寫眞、
海流調査や測候所建設、東宮殿下
の御成婚記念には別に百萬圓を投
げ出して、帝國學士院に提供し、
北樺太に探險隊を送り、全國青年
團に五百の優勝旗を贈り、日本分
縣地圖を四ヶ年に亘つて讀者に贈
呈したりするのも隠れた社會奉仕
である。

◆
毎月十日夜全社員の會講がある
社長が座長で社内投書や社外投
書の朗讀があり、社長の批判や
訓諭があつて指名された社員の
演説がある、野次も出れば半疊
も入る。——年に二回の半疊上
陸。——各部隊裝束競争の暮年會
——新年初頭士氣を振興する一
大新年宴會。之等は年中行事の
最も愉快なことである。終りに
大毎スピリットの横溢した我が
社歌の一節を紹介する。
我が敵は皆イザ／＼。露と散
りて土に伏せり。是こそ吾等
の勝利の宴。イザ／＼。眞實を
傳へて正義の旅路に。今ぞ吾
等勝てり。

諸戸清六翁行狀記

京畿道評議員 足立丈次郎

諸戸清六翁は、明治實業界の奇傑である、私はフトした縁故から前後十數年、翁の知遇を受くるを得た、そこで茲には翁に關する逸事二三を記述して見やうと思ふ、或は讀者の何かの御參考にもならうと信じて……。

諸戸翁は、夜一旦寢に就き三更必ず眼を醒す癖があつた、そして一二時間キチンと縛上に正座し、何事か深く黙想、沈思するのである、これは翁に取つて最も重要な日常行事の二ツであつて、翁は此の間明日の爲す可きこと、明年の爲すべきこと、明後年、十年後の爲すべきことを、熟慮決斷する時間であつたのである。——斯うして後翁は、再び床に就き毎朝日出前に床を騰つて起き出でたのである。

翁は壯歲盛んに米相場を遣つた、そして盛に財を作つた、だが晩年は一切市場の手を引き、農業と林業とに専ら志を寄せた。——百年の計は、人を育つると、樹を植ゆるに在り、これが晩年の信仰で、私達にも屢々所懐を漏されたことがある。

翁は餘り學問といふものはなかつた、亦た讀書家といふ種類の人ではなかつた、併し學問を信じ、之を善用する點に於てはさすがに一代の俊傑と思はるゝ節が多かつた

翁の居住する桑名郡長嶋村附近は木曾川、長良川、鍋田川などが貫流し、雨季には多く水田が浸害された。——翁が之を防止するために蒸汽排水機を備へつけたのは、餘程久しい前のことである、そして人は其の効果を疑つたが、實績は著々收められて行つた。

世間では翁を舊世紀式の頑固翁と思つて居る、併し翁程學者の説學問の効果をテキハキと利用した人は稀れである。——これは翁の非凡なる熟慮性、並に斷行性、進取性から來たものと思ふ。

翁は例の伊勢桑名町に本邸を有つて居たが、その桑名は小さい街であるに拘らず、早くから水道敷設を行つて居た——翁の寄進する所で、亦た翁がドレほど進取的アママを有つて居たかの一證となると思ふ。

翁は研究心にも富み、他人の説を能く傾聴した、丁度桑名に水道を敷設する時、大阪の旅亭にある私を訪問し『足立さん、鐵管が古物になつたら後はドウ利用するんだらう？』と奇問を發せられた、水道は之れから敷設するといふのに古物になつた後の鐵管の利用法迄知つて置かうといふのである。私には之れには感服させられた。

翁は亦た決然たる實行家、斷行家でもあつた、何時だつたか大隈侯

爵邸が出火し、同家から『只今火事』と打電して來ると、折返し『只今材木出した』と返電した、グス／＼思案ばかりして居る翁では決してなかつた、否、打ては響く天才的人物であつた。

翁の質素は有名なもので年中棉服羽織の紐は紙捻、汽車は三等、どう見ても田舎の水呑百姓といふ容態——併し健康には注意し、醫師の言は一々服膺して、些細なこともそれに背くことはなかつた、夜やすむ時には能ふ限り毛布が良いと聽いて、直に之を實行し、尙ほ友人にも極力之を勧め、中にはワザ／＼自分で買つて持つて行つたことさへある。

時間を嚴重に守つた人だが、おもしろいのは羽織の紐——例のカンジョウヨリにいつでも汽車の時間表をブラ下げて居たことだ。

松本さん、翁に就ては、マダ書きたいことはいくらでもありますが、がこの邊で一應打ち切りませう、餘り長くなるやうですから

お詫びの事

三戸 萬象

拜啓、毎度言行一致せず誠に申譯ありません、私のやうなもの、原稿でも載せて頂けば光榮の至りですから是非／＼と思ひ乍らその都度事故が起り不本意許りして居ります、今回も清津の共進會のバツクを引受けて永樂町で書いて居り一兩日後からは帝歴の出品にかゝります、それで今の處どうにもなりません、十一月號からは屹度お約束を果します、どうかそれ迄御容赦を(九月十一日)

旅行漫筆

京城郵便局長

橘川克彦

先月下旬江原道から忠清北道にかけて一寸旅行しました、此行は歸の一日だけ汽車で、其の餘は全部自動車を用いたもので、百四十里の道程、しかも山又山の間を、僅々一週間に踏破し、十四の通信機關所在地と其の沿道の部落を視ることを得ました。

出立の日は當地より原州（江原道）直行の自動車で出かけ、途中關州文幕間の漢江上流の渡船場、折柄の順風に帆を一杯に揚げて列を作し勢よく遡江し來る數隻の船に遭ひましたが、遠近の山や丘を背景に、鬱蒼たる兩岸の楊柳などと相映して、宛然畫中に在るが如き思をしました、此等の船は主に鹽類を積んで忠州丹陽方面に至り歸航にも米雜穀等の貨物が相應にあるらしく、時には寧越あたりまで行くそうです。

原州より大和へは道路の都合で横城を迂回して行きましたが、流石に江原道の東海岸と西南部地方を結び付ける唯一の交通系だけあつて、横城郡内に二箇の可なりな峻嶺もあるも、道路は案外立派にて往來も相應に多き様見受けました。平昌は部落としては至て微々たるも、斯かる山間に似ず珍らしく清冽な水に富み、本年の如き早魃にも、邑内の稍廣き水田は幸も其の脅威を受けず、見事な成育振りで時節柄快感を覚えましたが、此地方の主要産物たる島作の方は、之と反對に粟でも豆でも見るから憫

な立枯の狀態を呈し、最早數日の内に降雨なくば殆ど見込なしとかさなきだに不景氣風は此界限にも漸く吹荒みて、近來市場の如きも購買力漸減の傾向顯著とのことでした。

又寧越は李朝開國六十二年の頃端宗大王の幽閉された土地で、其の舊蹟少からず、又檀草の産地を以て名あり、邑外十五町許に在る報德寺は、新羅聖德王時代に建立の由緒ある古刹にして、現在の堂宇は近代の建築らしく甚だ貧弱にて一顧の價値なきも、境内は靜閑幽邃にして四百町歩に亘る見事なる松林の丘を以て圍繞せられ、自ら塵寰を脱して清遊に適する所と思はれました。

それより忠清北道に入り堤川の義林池を見る、邑より約一里、周圍二十町足らずの小池なるが、此地方では湖南湖北の稱呼は此處より出たと云ひ傳へらるゝ程、有名なものだそうで、鈴木道長官時代に大分經費をかけて周圍を修築したことありとか、一寸景色のよき處なるも灌漑用水を引く爲水量三分一に減じ、其の傍に在る名瀑も殆ど枯涸し居りて餘り感興を惹かず此池より釣れる金鱗銀鱗の鮒は大なるは尺餘もありて、之れを食せば三年生延びると稱せられ地方人間に最も珍重するゝのことで、晚餐に刺身で試みたるに、毫も泥臭なく一寸乙に食べられ、おまけにこれで延命長壽の仲間人が出來

るとすれば、至極結構な譯であります。

さて又蒼坪では少許時間の餘裕を得たので、中原氏の經營にかゝる清州郡北一面椒井里の天然炭酸水工場と其の湧出する源泉を見せて貰ひました、此處の様に何等の混合物なき純粹の酸泉と天然瓦斯の出る所は他に類なく、且下一日の瓶詰製造高は四打入百五十函とのことでした。

かくて夏の自動車旅行は、家に居るより涼しく、旅客も閑散期とて満員になること少く、又朝鮮人の服装も概ね麻の小纏張りしたもので多程垢汚し居らず、殊に近來到る處の驅除が行はれ以前程之に惱まざるゝことなく、一面道路樹は鬱蒼として連り、遠近の風光亦た拘すべく、心身俱に爽快を覺ゆることを得ました。

貴生堂主人

平田久雄

本町の藥舖貴生堂の主人津留崎さん、佛敎のふかい信者で、敬服すべきいろゝの逸話を有つた人だ。或る時或坊さんが佛敎關係の或事業の寄附勧誘に行き「但し金の儀は年々分納でよろしうございます」と大に粹を利かしたつものところ、津留崎氏曰く「イヤ、人は老少不定です、今日は斯ういつてゐてもアスは死ぬかも知れぬ、亦商賣も今日は榮えてもアスはどうなるか解らぬ、さきの約束して後々實行が出来ないでも困る」「デハ一體どう致しませう」「そこで、お話の金員は今そつくり差上げませう……」

米のなる木

鋪路警察署長 森 六 治

◇ 京城雜筆社から何か書けとの事だが如何に多忙でも書く暇のない管はないものを、それでも仲々書けぬ……遅れ／＼になつてゐると又社員の方からお話がある、感むつかしくなる、それと言ふのは外ではない、社長松本さんは同郷人中の名又家で京城に於ける文章家として釋尾氏と共に畏敬してゐる方だ夫れ故筆を執るのに躊躇つたのだ。

◇ 之れに就いて思ひ出す事がある、曾つて兒島將軍が南山の私共の親方として著任せられた時釋尾君が始めて總長室で會つた時『釋尾君君は作文がボツコーうまいな』之が最初の挨拶で釋尾君も『作文とはひどい……』と答へたと云ふ逸話がある、私は其の兒島將軍の所謂作文が下手で松本さんの前に出すのだと思ふと妙に氣が引けてならない。

◇ 處で申譯的に郷里の『わたしや備前の岡山そだち米のなる木をまだ知らぬ』と言ふ俗語に繋がる傳説に就いてお話しして見やう。
岡山藩の古老より傳へ聞いた話で何時か故事來歴に精はしい松本さんにお教へを仰がんものと思つて居つたのが其の儘となつて居つたので甚だ自分勝手のやうだが其儘を書いて旁々實を擧ぐ事とする。

一般の傳説として或る罪人を母とせる不幸の少年が獄中にそだち物心付きて日蔭に育ちし不幸を啣ち米の名産地に生れながら米のなる木をまだ知らぬと言ふ人生の悲哀を唄つたものだ……といはれて居る、處で私のいふ古老はその説を打消して決して斯かる傳説に誤らるゝ事勿れ彼の俗語は熊澤蕃山の夫人の物せられた唄であつて蕃山先生が備前を引揚げらるゝ時の長持歌(荷物運ぶ際の)であると斷言した、その理由は熊澤先生は名君新太郎少將(池田光政公)が禮を厚うして招聘した經學の大家であつて資性剛邁にして精識、その爲す處國家萬年の計ならざるはなし岡山縣下には現に其の遺蹟尠からず、當時備前に於て先生と對抗すべく併稱せられし津田重二郎(永忠)なる學者あり、當時備前藩は藩廳豐富にして時の幕府當局より嫉視せらるゝや津田の獻策により藩費を散して後樂園を開設す、その他開墾、埋立等の事業亦た、

その他開墾、埋立等の事業亦た、妙からず熊澤先生の晩年津田の最も手腕を振ひし時、熊澤の提唱せる兒島灣開墾意見と、津田の提唱せる上道新田開墾意見と兩説爭論となり、遂に君前裁決を仰ぎたるに當時の君公は津田説を採用せられ熊澤の説敗れ爲めに蕃山は備前を立退いたが、此の時白晝提灯を點し、長持(引越荷物)を擔ふ人夫達が前掲の歌を唄ひつゝ怒々城

下を退散したりと(その後私共が覺へた冠りつけに『暗い／＼晝提灯でお立退き』と言ふのを記憶して居るそれが當時の事を諷せしものなりと)その蕃山の主張は、岡山市を貫流せる旭川に架せる京橋下には當時千石船の繋留せられたりしが上道新田の開墾(即ち津田説)を爲せば川尻埋りて遂に小船だも通ぜざるに至るべく然も目前幾何の良田を得るに過ぎず船船舟楫の便を缺かば岡山市の衰亡見るべきものありとし、之に引替へ兒島灣を開墾(即ち熊澤説)せば千載の後尚ほ大船巨舶の通ずる事疑ひなし然かも尙萬頃の良田を得らるゝてふ藩政永遠の策なりしも蕃山の説遂に容れられざりしものなり、是れ備前の如き良米の産地即ち寶の山に在りてその寶の木を知らざる君公の暗きを嘲りしものにて、唄は蕃山夫人の作、人夫をして之を歌はしめしものなりと。

◇ 現に熊澤先生の豫言の如く明治二十年頃千坂高稚知事有名なる素歌(新)工事を施すも効なく現在僅かに小舟を上下するのみ、然も大船の淀泊地は三番沖となり五番沖となり共に市を距る事甚だ遠し私は常に思ふ果して此の説眞ならん乎、明治の代となり敢て宇野港築港の要もなし、眞に岡山築港を斷行せば市の繁榮或は神戸を凌駕する域に達せしにはあざりしかと。

◇ 『米のなる木』の俗語に對し之を囚人の子の作なりとする傳説と右の古老の説との二あり、併し私は後者を以つてその眞なるものならんと信ず。敢て松本さんにお尋ねし併せて江湖博識の士の御示教を乞ひたいと思ふ。

病閑漫筆

釜山日報社長 芥川 正

【三】

◇八月末は間もなく来た、秋風は何處の隅からか吹き初めて、腸患は全癒とまでは行かぬが三分の二は癒えたやうだ、同郷熊本縣人から黨弊救済私案に對する批判も幾百通か来た。

◇而して其の幾百通の批判の最大多數をいへば、貴説は實に結構滿幅の實意を表するも只實行難を如何せんといふにあつた、嗚呼相も纏らぬ熊本人士の傍觀的態度、批評的態度の多數なる哉である、自ら信じて善良であり郷土の爲めの救済行爲であると信せば、何故に自ら陣頭に立ちて獅子吼し且つ斷乎として勇往邁進せざると大喝破したくなつた。

◆今井氏の話

吉田 莊一

殖銀の今井人事課長、外に消樂はないが、野球だけは飯より好き、それを觀る時話す時は、全く無我夢中、お顔の紐がポロ／＼に解けて居る▲所で今井さんだと決して始めから野球狂といふ譯ではない、ソコにはソコで蓋も實もあるから面白い▲といふのは、殖銀の若い行員連野球團を組織するといふ時、何でも我々の一番こわい叔父さんは人事の親方……これを取込んで置かぬと將來の昇進にもかゝるといふので、爾來間がな隙かな人事課長邸を訪問し盛んに野球趣味を注入したものだ▲スルト其處は外に消樂のない人事課長のことだ、忽ちお薬が利き、當節は若いものより課長の方がよつほど熱心「諸君ッ、大きいことは言はぬが、せめて内鮮銀行界で第一等のチームにならざあソウ」。

◇本年の盛夏は猛烈な暑さで、健康體の人でも少々困つたのだが、余は平素に於て餘り健康體ではないが、殊に今夏は漫性腸カタルで頗る閉口した、之を治するに醫療に頼るか、或は江間式の膝下丹田療法を探るべきかと只管研究を凝したのである。

◇此の研究行爲は他の一面に於て却つて病患の全癒を遅からせたかも知れぬ、即ち余は七月の初旬には病氣ながらも約一週間京城、大邸に旅行したが、其の中旬から釜山日報社内の自宅に病臥した、病臥といつた處で熱のあるのでなく又苦痛のあるでない、依て病臥中に何事をか爲して見ようと考へた◇而して考へ出したのは幸ひ此の病閑に於て豫て懺歎に堪へぬ郷里熊本の黨弊打破に就ての所懐を書き綴り、之を小冊子として知己知友に頒ち同志の士の勵起を促進す可しといふことであつた、其處で病床に蟠居し乍ら起草したのが『熊本黨弊救済私案』の小冊子であつた。

◇『熊本黨弊救済私案』は豫ての所懐を書き綴ることだから、多くの時間を使せずして脱稿したので直に之を釜日社の印刷部に渡して至急に刷り上げさせた、書くことと印刷することは先づお手の物だから、餘り時間を費さずして間もなく三千部の小冊子が刷り上げられた。

◇處で此の『熊本黨弊救済私案』の小冊子三千部の發送先きは、又早くからそれ／＼調査して置いたので、是れも亦發送に熟練し居る社員の数に托して之を發送させたので、三千部の多數が比較的迅速の間に之れが發送を了つたのが七月の下旬であつた。

◇盛夏の候の病患といつた處で病患却つて病閑を得たので、余は平素の郷里救済策と信じ居る意見を其の病閑に草し之を在縣内外の熊本縣人に配布し了つたのは聊か爽快の感があつたが、併し漫性の腸患は未だ如何にも快癒せぬので遂に八月七日に東萊温泉場の別荘に閑臥して徐ろに腸患を療養することにした。

◇東萊温泉の別荘といへば、頗る立派な香風流な構へかと思ふ人もあらうが、只だ僅に膝を容るゝだけの貧弱な家屋、嘗て鎮南浦の親友西崎君が其の建築中の家屋を見て、餘りの貧弱さだ金錢は貸手もあらうではないかと言つて苦笑したことをあつた。

◇併し余は此の貧弱な別荘に横臥して好きな書冊を繙き、朝夕には直ぐ隣りの念佛庵で念佛三昧に入るのが余が此頃の生活で、殊に八月七日以來今回の別荘住居は腸患療養も兼務し勞々三千部の小冊子を多數の熊本人士に送つた、反響如何をも臆知せんと待ち構へたのである。

破邑温泉遊記

樂堂 西崎 鶴太郎

暑い八月の中頃、數日の閑を得たので、自分は此機を利用して谿谷の幽趣を味ひ、仙境に悠遊して見たいと志し、肥後の若殿原三人を伴ひて、平安南道陽徳郡の破邑温泉に行つた。

破邑温泉は思つたよりも好い所であつた、平元街道の中心地點である新邑附近は、凡山凡水で朝鮮の田舎では、何處でも見らるゝ風景であるが、裏の小山を越してすぐ足下に現はれた谷川の第一橋にかゝる所から、兩岸の山は次第に迫り來りて、深山幽谷の趣は、橋を渡る毎に濃厚になつて來る。青龍白虎、碧水、蒼松、黃鸝、紫芝と五色の橋を六つ渡りて、七つ目の無名橋を越せば、そこがすぐ湯の宿である。

軒に迫つた山々は、珍らしくも老松を戴いて、前を流るゝ小川の向ふにはすぐに又削り取つた様な山が聳へて居る。窓からは寛の音、水の響、虫の聲それらの交響樂が冷々とした山の氣と共に流れ込む。自分等はこうした涼しい部屋で、碁を打ち書を讀み、例の病の腰折を考へたり氣儘な晝寢もしたり、さて家居に倦みた時は、程近き溪流を辿りて、柳下石上に垂輪を試み、或は又僅かの水のごみに投網を打ちたりして、其獲物

の晚餐の卓上に飾る等の事が自分等の日課であつた。

自分は、こうした谿谷の閑寂な村には限りなき愛著を感じる、いろいろな都合で、家族を伴ふ事が出来なかつたのは遺憾であるが、三人の若殿原が子供のやうにはしやぎ廻るのを見ると、自分まで生れた儘の自然兒に返つた心地がする朝夕臨江亭で、天地の自然に親しみ乍らも、都市を遠く離れただけそれだけ自分は更に自然に近接して來た様に思はれてならぬ。僅か二十町の所に、新邑の大部落があるも、此宿からは幾つもの山を隔てゝ、家々の煙さへ見へぬのは何といつても山里深い感じがする。

裏山の、大きな松のある高い所には幾度も登つた、そこら一面に秋の草花が咲き亂れて、なよ／＼と涼しい風に揺られて居る。色々な虫は響に鳴きて、名も知れぬ小鳥が、手近い木の枝に自分の居るのも知らぬ氣に囀り交はして居る。遠くの山々はうす紫に映へて、美しく暗れた空に果てしもなく連つて居る。自分は足下の小草に造化の微妙な作用を感じ、遠い山並に對しては天地の雄大壯嚴な氣に打たれた。眼下の谷に沿ふ路を辿る人を眺めては、何んだか自分は優越な地位にあるが如く思はれ、一種異様な靈感が、胸に溢れて大

きな聲で會心の詩でも吟じて見た氣になつた。

高らかに聲はりあげてわれ歌ふ空晴れ渡る山の頂。

いと低き枝より枝に飛び交ひて小鳥は啼けりわが前の木に。

或る時は、晝も暗いやうな幽谷を溯りて、思はぬ岸にたゞ一本咲ける萩の花を見つむる時であつた。

世に知れぬ歌よむ人に似たるかな谷間に咲ける萩の一本。

温泉は、無色透明で湯の量も豊富である。殊に湯籠の設備があるので、浴槽に浸りながら、肩を叩かせ足を打たす事も出来る。

冷々／＼と秋の夜風に吹かれ來てまたも温泉の籠に打たるゝ。

此温泉の滞在中には、新邑の有志が碁打ちにも來て呉れた。自分等は何等の退屈もせず眞に愉快な數日を過した。山岳の氣分、谿谷の味ひ、殊に色濃き紅萩の花が、枝もたは／＼に咲き亂れたる風情など何日まで居ても飽かぬ眺めであつた。更に自分は、歸途成川に泊りして、純朝鮮式の古典的建築物である、東明館に遊び、彼の有名な成川十二峰に對し、往古の榮華を偲びて新たな感慨に打たれた晝の虫啼くにまかせて高殿の壁畫語らず秋の風吹く。

圓ろき朱塗りの柱が幾十本となく並び立ちたる、晝棟畫欄の樓閣にわれも亦畫中の人となりて、降仙樓上に半日を遊び、碧水を湛へたる十二峰下の沸流江に、酒を載せ妓を招じて舟を浮べたる一夜の歡は、特に自分の爲めに此宴を張られたる人々の情と共に、永遠に忘れる期はあるまい。そうして破邑の温泉と成川の東明館とは、いつかはまた必ず自分を再遊せしむるであらうと信ずる。



壽町の家

— 徳野氏の『僑居漫筆』を讀んで —

殖産銀行 中島 司

も其處に迎へ、歌筆も其處で執つた。而して客を送り書に倦み、筆に厭きた時、起ちて南山の積翠と對し北岳の煙景に面し、如何に私は浩然の氣を養つたことであらう。

思へば不思議の御縁である。私が大正六年の秋に、京城日報社をやめた當時、或る先輩から朝鮮鑛業會の主事に任じて呉れないかとの相談を受けた。私は其の時すでに東京へ行く決心をして居たし、又た私の友人が久しい以前から鑛業會の主事を念かけて運動して居た事を知つて居たので、先輩の好意は厚く謝し、東京に引き揚げた。

其の時早大校友會で私の送別會を『白水』で開かれた席上で、今は故人である津田銀雄氏が、私に對する送別の辭に、中島君は是非朝鮮に居て貰ひたいから送別の言葉は申さぬと言はれたことを記憶する。其の津田氏は鑛業會の役員であつたから、氏は先に申した先輩と共に私を鑛業會に動かせる信念であつたであらう。さういふ點で現に鑛業會の主事である徳野さんが曾て私の住んだ家に起臥して居られるといふ事は、まことに以て不思議の御縁と申す外はない。

彼の家には私と義母と家妻と、高商へ通ふ弟と、私の三人の男兒と合せて七人が住んだ。而して今年五歳になる三男は大正九年の春まだ寒き二月の末に彼の家の温突で、颯々の際を擧げたものである。

『京城雜筆』九月號で、徳野眞士さんの『僑居漫筆』を拜讀して、まことに懐かしく思つた。なぜと申せば、今徳野さんの住んで居られる壽町の所謂『僑居』なるものは、曾て足かけ五年の間、かく申す中島生が住み慣れた思ひ出多い家だからである。

其の徳野さんの壽町四十三番地のお住居こそは、去る大正八年の春私が殖産銀行に招聘されて、取り敢へず單身東京から赴任し、東京建物會社で普請中であつたのを、まづ先きに借る約定をし、其年の五月に家妻と兩兒とを呼び迎へるが早いか、塗り立ての壁の乾くか乾かないうちに、住み込んだ家なのである。それから大正十二年の九月に南山町の家に轉居するまで其の家に起臥し、其の家から朝夕銀行へ往復した。

人間といふものは妙なもので、自分の住んだ家に、誰れが後釜に据らうとも、敢て關心する所もなさうなものだが、矢張りどんな人が來て、どういふ風に住んで居る

のだらうかと、餘計な氣をつかふものだ。誰れもがさうではないかも知れぬ、少くとも私はさうだ。私は徳野さんを知りなかつた。甚だ相濟まない事であつた。併し私の友人から間接に、朝鮮鑛業會主事の徳野さんが、私の舊居に引越された事を聞き知つた。それからといふもの、度々彼の家の前を通る時、其の二階の窓から射す電燈の光を仰ぎ、春風秋雨五年の間暇さへあれば讀書三昧に耽つた室に徳野さんは果して安處して居られるであらうか、と思つたのも一再でなかつた。

徳野さんの隨筆を讀んで、氏が其の家に満足して居られるのを知つた時、私は實に愉快に感じた。同時に徳野さんを懐かしく思つた。

『南山も北岳も直ちに私の庭園』と言つて居られる。全く其の通りだ。彼の家の二階は、敢て眺望絶佳とは申さぬが、少くとも南山北岳を望むに遺憾はない。私は彼の室を自ら『對巒居』と稱して、朝夕南北の峰巒に對したものだ。彼の二階は私の書齋兼客室であつた會心の書も其處で觸き、心契の友

大正八年の夏から其年の暮も押しつまる頃まで、私は故三島頭取に隨行して東京に出張し、まる四ヶ月家を留守にした。さうして今數日で歸宅するといふ間きわに、隣家から火事を出して、私の宅のすぐ東裏なる殖銀の森兼之さんの宅が側杖を食つて全焼し、森さんは家財大かたを灰にし、正月の餅まで焼くといふ災難に遭つた。地位から申すと私の宅がまつ先きに焼けるべきであつたのに、火元から黒煙が吹き付けるうちに風向きが變つて、家も家族も幸に免かれた

當時家妻は大きな腹を抱え正月早々には生れる豫定であつたが、火事に驚ろいたか、二ヶ月も延引して三男が飛び出した。姪婦火車に遭へば産兒にあらずありと俗に云ふが、果然其の兒は手首に黒豆ほどの『アザ』をもつて生れた、此の兒元來腕白で理屈屋で、さうして頑健だ。

壽町の家に足かけ五年住む間に、私初め家族一同病氣らしい病氣に罹つた事がなかつた。火事には面したが焼けずに濟んだ。子供は殖えた。貧乏ばしても愉快に日を送つた。まあ無事息災の月日であつたと言へる。縁起がよいと言へば言へやう。兎に角新築以來不吉な事もなく、悪病も出ず、ピンピンした人間が無事に住んで居た家だから、徳野さんもその積りで安住なさつて宜しいと思ふ。

私は彼の家に徳野さんを得た事を特に愉快とする、而して徳野さんが私と同じ心もちで其處に適應せられるのを知つて欣快に堪へない

還曆に際して

麻生藥業所 麻生 音波

松本さん、毎度雑誌を送り下さつて難有存じます、嬉しく面白く拜見して居ります、今村さんや篠田さん達は仲々隅に置けませんナ、皆さんが夫々特色がありまして賑かですナ、私にも何か書けとおつしやるが、私の様な無學な者が書きますと耻を掻きますヨ、私の様な者が出しますと雑誌の品が下りますヨ、御氣の毒ですヨ、併し枯木も山の賑ひと云ふことがありますから書いて見ませう。實業の日本の本年の元旦號を見ましたら、大倉喜八郎さんが八十八の米壽の御祝をして、令息喜七郎さんに身代を譲り、自らは蒙古の關鑿に御出掛けなさるとありました、何と痛快な元氣ではありませんか、其の一節に曰く、翁が六十一還曆の祝ひの時に重野安禪先生が漢文で御祝詞したのが掲げてありました、私は本年九月が還曆です、私も自祝する丈けの嬉しいことがあるのですから記念すべき年です、私は是れからウンと働くのです、私の働き場所は豆満江の沿岸に鐵道を架けて北滿洲、西伯利亞に皆さんを御案内するのです、私は大倉喜八郎さんや淺野總一郎さんが一生懸命事業上に熱心に働くのを見て、實に氣持良く痛快に思ふのです、此の二先輩の働き振りを眞似て、大奮闘大努力して長生きするのです、けれども十年の後には此の二先輩の事業よりも、私の事業が太くなるかも知れませんが、麻生の事業が良いからとて他人が直ぐ競争することは出来ないのですヨ、つまり獨占的の事業ですヨ、大倉さんのや淺野さんの事業は直ぐ他人から競争されるのですヨ、判りませんか、判らぬでもよいのです、十年の後を見て下さい判りませう。

漢江雜記

殖産銀行

櫻井小一

【一六】

更に江華島側の江岸より約一里餘を隔て山の中腹に松林と城壁とに圍繞されて有名なる傳燈寺が見へる。寺の境内と其の外側が樹林の有無で著しく際立つて見へ、一寸支那人の頭見たいな感がある、堂宇の丹碧は昔ながらの色を留めて居るやうだが、中は所謂伽藍堂で何にもないといふことである。曾て徳富蘇峰先生も此の寺に遊ばれたが失望の體であつた、ツイ陸上の景色に夢中になつて居る中に『横一』の難所を難なく通り越すと前方には舊通津郡より江華へ渡る甲申の渡場が見へる、鮮人家屋が小高き山の中腹に十數軒見へる、

亞鉛板葺の内人家屋も一軒あるやうであつた、それは貨客の取扱所らしかつた。此所より江華の邑内へは約一里、今では消路が改修されて護謨輪の車が三四臺は往復して居る、永登浦へは十二三里之れも消路が坦々として續いて居る左方は舊通津郡の地方で河に臨みて文珠山があり、之を繞りて城壁あり、江華島の城壁砲門と相對し要害をなして居る、此邊兩岸の山相壁まりて風光甚だ佳、殊に近時文珠山城趾に殖林の計畫をなせるものあり、樹容鬱蒼たるに至らば更に美觀を添へることであらう、甲申は海州通ひの汽船も寄るし又仁川より日々發動機船の便がある海州通ひの汽船は甲申の前で汽笛

を鳴らし只汽關をストップするのみ、艀船は豫め貨客を載せて航路に待ち受け、其登載を終るので誠に危険なる仕事である、愚圖くすれば潮流で汽船ぐるみ押流されるので、實に危険千萬なのだが何とも仕方がない。此の狹窄部には昔江華の留守が船橋を架して出入したさいふが現今では續いて居るのは山から山へ引張つた電信線ばかりで旅人は不相變輪形の舟らしきもので交通して居る。

九時半頃には月申と稱する昔の豐徳郡領井浦への渡場の前を通る、前方遙に領井浦町が波上に浮んで見へる。其の上の方に松都満月臺の後に屹立する鋸の齒の如き山容が隠見して居る、此所を出ると、江華水道と漢江本流と合するので、江華水道は漢江に對して裏筋きのトの字のやうに合する、故に龍山行きは後返りする程急右折せねばならない、然かも上げ潮の時三方よりの流れが衝突する場所、水面は急に廣くなつた渦があつて非常な水勢である、而して其の靜まつた所必ず砂の洲があるので頗る危険である、水先は注意して漣筋と思ふ所を選んで舟を右の方へ轉廻して通津の突角を一廻りすると共に、江華には別れを告げ餘々漢江の本流に入る。水は潮流の關係で別に雨も降らぬのに濁流である、潮には乗つて居るが向ひ風になつたので波がある、飛沫は船首のカバーを越へて來るが若しも船室に

逃込んで肝腎の水路の視察はそれこそ水泡に歸するから眼に潮を浴び風に帽を取られても飽く迄頭張つて案内の説明を聴く、恰も左舷に當つて漢江の中流に小島あり、蛇島といひ又チャーマン島ともいふ、其の因縁は昔獨逸の一小汽艇吐所に沈没せるを以て此の名ありといふ、又蛇島といふは上流より流れ來る蛇が凡て此の島に泳ぎつきて多數の蛇が棲息するが故に蛇島とも稱すと傳ふ、蓋しチャーマン島と蛇とは音相通ず、その何れが眞なりやは之を知らない、河幅の廣きと濁流とを揚子江に髣髴たりとも言はうか、又河は迂餘曲折するが故に進路判明せず恰も湖水の如き觀がある、只遙に紫水晶の如く聳立する北漢山に依りて略々龍山の方面を知るのみである。

河の奥に進入するに従ひ『泊付鼻』の難所に來た、即ち通津川の一の突角である、下りには潮の爲めに舟が此の突角に推しつけらるゝ虞あるを以て此の稱ありといふ。既に過ぐる年惠比壽丸が此所に沈没の不幸を見た、蓋し此の地點は屈折の具合が上りには別に左したることなきも下りには一大難所たるのである、更に上れば河は右直角に屈曲し其の左角の所へ臨津江が注入して居るから恰も丁字形を劃し、大曲と稱せられる、砂洲あり且つ合流地點なるを以て構取りは大に困難し不相變濁流の外側を通航す、此所より兩岸の地勢漸く開け山はなくて概ね平地である、又田畓あれども概して漢江沿岸の平地は洪水に浸され易く、只蘆荻の生ずるに任せる状況である、之を草坪と呼んで居る、草は附近住民の燃料、敷物、笠の材料ともなり又近時廉の材料ともなり相當の

價格を有す、又輒近未墾地利用や水利組合に依り土地利用を出願するもの多しと聞けども防水排水其の他開墾に數十萬金を要す可く、急には利益も擧るまい、左岸は坡州郡にして遙に長湍驛前に在る山上の一樹を望見し得可く、右は舊通津郡即今の金浦郡にして通稱百間土手と稱する場所、其の盡くる所に金浦の鼻が出て居る、是れ亦下りに船夫を泣かしむる困難の場所である、百間土手とは平地の河に臨む断面が恰も土手の如き觀を呈するに因みて附したる名稱で所謂堤防でないから水には何等抵抗力なく、潮の上げ下げに漸次侵蝕されて河缺を生ずると共に下流の何所かに土砂の堆積を現出するのである、舫船夫は夜中土砂崩壞の音響で常に半夜の夢を破らるゝといふ。

◇ 金浦の鼻を廻れば金浦邑内は遠方小丘の下に在り、有名の大銀杏樹の茂みも見へる、又左方に陵あり不相變樹木鬱蒼として水禽が其の上を飛び廻つて居る時は既に十一時を過ぎた、更に約三十分航行の後本航路の最大難關たる『ソックリ』に達した滿潮の水面上は何等の異狀をも認むることは出来な、只左方に小河の流入口あり而して不相變兩岸は草坪なるを以て河底は沈澱滞置せる泥沙のみにして頗る淺く且つ潮流洪水に依りて絶へず濡を變化し深淺常なしである、然かも堆積せる砂は固定せるが如く見ゆるも殆ど水を含んで浮動して居るので若し誤りて船舶の底を砂洲の上に垂せんか水流潮水が船底に激して直に砂を掘り傾斜して瞬時に覆没す可しといふ、然かも此邊にて沈没せるものは曾て再び其の姿を現はさず全く砂中に埋没し終るといふことだ、船體も生命財産も其

の名の通り『ソックリ』消失す豈に恐る可き難所ならずやだ、宮丸も頗る慎重に梅をとりレットを投入し又は竹竿を以て深淺を測りつゝスロウにて進む、乘るもの皆恟々たり幸に最淺の部分九尺なりしを以て約六尺吃水の宮丸は三尺の差を以て無事此所を通過し得た、是れに次いで直に『カソサン里』の淺瀬がある、此所は先頃の洪水の爲めか深度を増したるため難なく十二時頃通過し、漸く安緒の胸を撫で下して直に晝食を始めると、間もなく引き續き『鶴の巢』と稱する難所にかゝつた、其の名

の起りは附近の樹上に鶴の巢ありたるに因みて名づけたとのことである、現在の鶴の巢は昔時の場所とは變更し、餘程上流の方に移動して居る。

◇ 漢江の凡ての難所を無事通過し、楊花津渡場の尼寺を右に見て龍山に著せるは午後一時半であつた、如意島の砂原を吹いて來る風が殊に暑く感ぜられた。——歸路は暑いけれども汽車で歸つたが捨て難い風情ある田舎娘のやうな漢江は早く化粧をして遣りたいやうな氣がしてならない(終)。

讀東湖正氣歌

京城婦人病院長 工藤 武城

年閱二百卷四百。大日本史冠史籍。光陰削之及後昆。敬神愛國見心赤。一句一章動且精。堂々弘道館史名。齊昭淑之垂竹帛。大義說得太分明。潛鋒駭瀾又滄泊。佩絃助之撼木鐸。幽谷東湖父子賢。水戶學風眞堪託。逆臣直弼輕天朝。烈公嚇怒欲除妖。忽蒙譴誣坐幽獄。櫻田門外迸血潮。君側暗雲未全去。邊疆夷狄甚驕倨。東湖畫策獻主君。事未成而陷呪詛。牢裡三年筆尚呵。朗々唱出正氣歌。憂國志士吐肝膽。天日排雲如掃魔。孤忠乾坤三辰上。剛勁氣迸國光燭。一劍撫髯千載間。雪中松柏頌元々。揮鞭立大極陣頭。萬馬不嘶凝耽眸。執毫向陶泓硯石。千章忽地現所由。安政二年地軸裂。江都炮煙一凄絕。猛然救母盡子道。身伏梁下全孝節。嗚呼孝子兼忠臣。長篇歌詞見天真。膾炙人口永不滅。芳躅煌々泣鬼神。臨危守節偏無改。忍死捐生聊不悔。網常如鼎人身輕。一柱擎天壯心在。

學鷗曰、句不煩雕刻、語悉出眞誠、是吾擔雪兄氣性之所致、與輕薄浮揚詩人、自異其趨向矣

加藤清正と間島

法 學 博 士 篠 田 治 策

私は十二歳の頃好んで日本外史を讀んだ、日本外史は文章流暢にして勇健、其戰爭記事の如きは最も痛快であつて、聲高らかに朗讀したものだ。殊に外國戰の記事に至つては興味津々たるものあり、加藤清正が北韓より元良哈まで攻入つて海を隔て、富士山を西南に見たなどは、破天荒の壯舉と思つて、乃公も將來軍人にでもなつたら、異國を征伐して國威を輝やかさばやなどと、空想を抱いて喜んで居つたこともあつた。

元良哈の地は即ち今の間島地方である、會寧邊の鮮人は今でも間島をオランケイと呼ぶものもある。三ッ兒の魂自までも無いが、十七年前に所謂間島問題の起つた際、私は同僚と共に間島に侵入したが、其時直ちに頭に浮んだのは清正の事蹟であつた。仍て其時少しく調査して見たこともあるが、『清正記』其他日本の書物と、韓國の記録と一致するもの多く、又地理上より見ても記事と一致する點が多く最も愉快であつた。只北關志には清正を倭將清正と書いてある、清正は堂々たる偉丈夫であつて、決して清正では無かつた。

清正は會寧にて二王子を擒にしたが、會寧では戰鬪はせぬ、叛臣の鞠景仁等が二王子を擁して降伏したのである。現に會寧に在る清正の石碑と稱するものは實は清正の碑では無い、日本軍の撤退後に、忠義の士が起つて此等の叛臣を誅した記念碑であるが、此碑文によるも當時の事情が能く判る。

清正は會寧にて二王子を擒にしたる後、通事を介して土人に元良哈の様子を聞いた。元良哈は武勇に長したる國であるといふので、清正は即座に、然らば例令太閤の命令は無くとも、彼等に日本人の弓矢取る様子を見せ呉れんとて、降伏したる朝鮮兵の笠や鎧に南無妙法蓮華經の題目を書かせて、先手に押し立て、元良哈の城塞を前面より攻撃せしめ、日本兵背後の山に登りて、五十人三十人にて早く程の大石を、金挺にて掘り崩し、山より下へ落しかけ、更に鐵砲を打ちかけ、一氣呵成に十三の城塞を攻め落した。清正は猶も下知して甲冑を

解かしめず、敵の夜襲に備へしめたが、夜に入つて敵は果して逆襲して來た、日本軍は奮闘して之を撃退したが、清正は我は兵少くして懸軍萬里、士卒亦疲勞せるを以て、此弱點を敵に知られては一大事、彼等が陣形を立て直さざる内に、勝に乗じて之を追撃するを得策と考へた。是に於て直ちに追撃戦に移り、翌日には元良哈の都へ攻め寄せ、火を八方に放ちて之を焼き盡したのである。清正の此進軍の徑路を、記録と對照して見ると、大體に於て明瞭であるのは最も面白い。私は十五年前に此問題に就て講演を試みたこともあるから詳細の事は略するが。會寧より豆滿江を渡り、器砂洞の支那側の兵營の在る地點より、左に折れて間島に通ずる舊道がある。此舊道は黒山嶺を超へ、太拉子を経て龍井村に通ずる道路であつて、今尙ほ所々に石壘の遺跡が存在して居る、十三の城塞なるものは即ち之れであらふと思はる。又此等の地點より、一日行程にて達した元良哈の都は、必ず今の龍井村であらねばならぬ。地勢上此舊道より進めば、自然に龍井村の平野に出づる外に道は無い。龍井村附近の土中には、古瓦の破片が夥しく散在し或は大なる礎石などもあり、又川を隔てて大小無数の古墳が在る。龍井村は我等が十七年前に、變裝して間島に入り調査を爲したる際に、間島全體を司配すべき適當の地點として撰定し、三ヶ月後に公然と乗り込んで、統監部派出所を開いた地であり。現在の日本總領事館の所在地として大に發展して居るが、此地が其の後の調査により、元良哈の都の跡であつたのは實は偶然と言はねばならぬ。

清正に焼き拂はれた元良哈の都は、其後間島一帯の住民が、清の太祖になつた奴爾哈齊の爲めに驅り去られて、三百年近くの間無人の地となつた爲めに、遂に復舊の機を得なかつたが、十七年前の我等の撰定によつて再び繁昌の機運に向つたのは、歴史は繰り返すと云ふのであらふか。

加藤清正の間島入りは、一時の出來心で、單に日本人の武勇の程を、武勇の稱ある元良哈人に示さんが爲めであつた。我等が二ヶ年餘に亘る間島に於ける行動は韓民を保護すると同時に、間島一帯を韓國の領土となすべき大抱負を持つてのことであつた。惜むらくは當時滿洲に於ける日清間の諸懸案と交換的に、其領土權を支那に譲り、永久に國境の不安を残したものである。

加藤清正を起し來つて、再び日本人の武勇の程を、元良哈に示して見たら、どうだらうなどと夢の様なことも時々考へて見ることもある。

休養の說

—ゴルフに對する一考察—

總督府鐵道部長 弓削 幸太郎

【二〇】

福音を説き、これにある優遇を興へ、これが指導法を講ずるといふことは識者のつとむべきところであると思ふ。

◇
吾々の生活では、いつも緊張に つまめて、弛緩を排斥する。吾々の生活は、いらくとして、少しもゆとりがない。吾々の生活が、果していつまでも、緊張、緊張で、押し通せるものであらうか。

◇
最近の歐洲大戦争は、歐洲人が餘りに緊張に傾きたるため、人心の奥底に潜在する或る力が爆發したものであると説明する學者がある。果して然らば、緊張の結果にも恐怖すべきものがあるのである。近代では、戦争は讚美すべきものでなく、これを排斥すべきものとしてゐる。たとへ戦に勝つても、戦けなかつた程の利益はないものとせられて居る。吾々が讚美する緊張が、吾々の排斥する戦争まで生むものとするならば、緊張も呪ふべきものとなるのである。然し、吾人の生活上、緊張を排斥することは不可能である。只可能なるはこの緊張に、適當、適量の解放を與へて、戦争の如き、暴威を振ふ事のないやうにするより外はない。

◇
原始的頭腦の活躍は、高級頭腦の休養となり、近代生活にゆとりを與へることになるのである。此の高級頭腦の緊張を解放して休養を與ふることを『リラクケイション』即ち弛緩と云ふのである。

◇
原始的頭腦の動きを放任して置いたならば、結局原始時代を再現することとなり、其効果は堪えかたきものとなるのである。こそで弛緩法の研究といふものが重要になつて來るのである。米國あたりで夙に弛緩の福音を説き、その施設につき社會運動家、教育家、宗教家等が努力をして居るのも譯のあることが諒解される。

◇
弛緩作用として、屢々起るもので困まつたものは、戦争である。そこで戦争の代用品として運動競技の或ものを考案してゐる人もある。アルコールの如きも、一種の弛緩作用を爲すものであるが、あまり感心しない弛緩法である。弛緩は必要だ。止むを得ないものである。必要だとしても自然に出て來るものである。どうしても出て來るものならば、よいものになつて來てもらいたい。そこで先づ弛緩の

我國に於ても、心機轉換法として種々なる弛緩法が實際に行はれてゐるが、吾人の特に獎勵するの必要ありと思ふものは屋外運動である。現代文化に、或程度の去勢を遂げられた人——よく云はゞ修養の積まれた人は、争闘、其他殺伐な弛緩法は取らないけれど、これ等の人の現に行なつてゐる弛緩法にも、甚だ以て感心しがたいものが多い。又充分に、文化的去勢を受けない多くのうぶな人達は、小兒の生活そのものゝやうな、屋外運動、競技を盛に實行すべきである。之れによりて吾人に太古より傳はつてゐる原始的頭腦を満足せしめて現代の喜ばざる戦争其他惡しき弛緩法を逃れることが出来ると思ふ。文化的に、特に東洋流の文化的去勢に中毒された人、又は健康の勝れざる人達は、屋外運動を充分に自らの手足で爲し得なかつたり又は好まなかつたりすると思ふが、此等の人は屋外の運動競技等を見てこれを樂しむことによつて充分に弛緩の目的を達することが出来るのである。運動競技なるものも選手業となつては弛緩法の目的に叶はない、仕事となり義務となり、精神の壓迫を感じるものではない、けれども多數の他人の弛緩に助けとなるので、選手その人の成績は多大である。今日選手諸君が尊敬されてゐる理由は充分に道理に叶ふてゐると思ふ。

◇
屋外運動の一つとしてゴルフの如

きも最も適當なる弛緩法であると

きに依つて高級頭腦を休めるとこ

みはない。

受け継いでゐる、原始的の頭腦も
でもらいたい。そこで先づ弛緩の
屋外運動の一つとしてゴルフの如

きも最も適當なる弛緩法であると思ふ。

◇
ゴルフには所謂ゴルフ道なるものがあつて、ゴルフ試合は如何にも紳士的武士道的で高尚無比なる良運動であると稱せらるゝ、吾人も全然養成するところであるが、それは弛緩法の説明ではない。弛緩原理からゴルフの適當なるものであると云ふ點はゴルフアが人類の祖先が爲したるが如く、山野を歩き廻り、棒を以て打つ、球を追ふて弓矢を捜すが如き、原始的の働

きに依つて高級頭腦を休めるところにその大なる價值があるのである。ゴルフ試合に可なり頭の働きたり、熟練を要する點からゴルフは精神を消耗して却て弛緩法とならぬと考へる人もあるが、これは大なる誤である。斯くの如き頭の働きたり熟練とは、吾々の古い祖先の既に所有したところで、近代人の日常の仕事に於て働かず高級頭腦の働きたりとは別なもので、疑ひもなく精神弛緩法になると云ふ事は何人も實驗上證明するところである

みはない。
旅を樂みたい。

◇
高島屋が京城へ来た時はゆつくり一週間見てやろうと待つてゐたけれどもとうとう見ることが出来なかつた、朝鮮にて見る左團次、それは餘りに期待はされまいが東京を離れてやるとこを見て置くのもいい、たかしまやと云へば僕は久松町を思ひ出す、その時分の菟雀(今の松茸)が好きだつた、今度は來てゐないとのことだがつかりした。

旅

木 浦 福 田 有 造

◇
生活に飽いたと云へば如何にもニイリストの様だけれど、そう云ふ意味の飽き方でない。
兎に角何となく飽き／＼して生活してゆく。

それを如何しようとしても抜け出すことが出来ない、或は宿命かも知れない。

その生活状態から飛び出す様にしてよと思つてイキを吐くつもりで旅にでも出たらと思つてゐても出来ない。

◇
支那の友達から支那を見ねばと福洲界隈からまで云つて來る。

毎年秋になればゆけるつもりであるけれども三四年來實行出来ない手近い金剛山あたりへでもまだゆけないのでマゴ／＼してゐる、こ

の邊で乃木大将の熟慮斷行と云ふことをやつたらばとも思つて見る一層のこと洋行でもと考へ直しても見てゐる、それとても今の所では二三年實行が出来ない様だ。

所が變れば気分も變る。
そうして一轉機を劃したいと思ふ。それには今がいゝ時かも知れない

何處で暮すも一生ならばとも考へて見る、ソコに悲哀がある。
かくして時代は推移する、僕の昨今は不安と焦慮に追はれてゐる。こんなことでも書かねば何にも持合せのないのを悲しく思ふ。

◇
旅へ出たい、心ゆくばかりのんきな旅へ……と云つて全然旅をしないのではない、ちよい／＼京城や釜山や内地にはゆくも野暮な用ですぐもとの古集にゆく、旅の樂し

◇麻生氏の書

吉 田 莊 一

鑛業家麻生晉波氏が本號に『還曆に際して』の一文を寄せた、ところがそれと同封で本社に送つた手書が又なか／＼振つて居る、ことに訂正無用！と喝破したところなど痛快至極、最も同感である、そこで左に掲げて見る。

拜啓、先日は參上種々御教示を仰ぎ御蔭を以て目下印刷中に御座候。今回は御勧めに依りて貴誌に出すものを書きました、御笑ひ下さい。處で本稿は小生の書いた儘訂正せずに御載せ下さい、若し又文中他人に不快を與ふる思ひありて訂正せねばならぬ點あらば此の儘御やめにして下さい、コンナものは本人が書いた通りでなければ書くものゝ心がキツつき、全文が死んで仕舞ひます、ドーカ此の事宜しく願ひ上げます(九月十八日)。

馬上醉吟行

久原鑛業會社
京城事務所

小 瀧 元 司

〔三三〕

の内にも何か書けとの事でした、一
此時はもうやぶれかぶれでしたか
ら又候麥液のお世話になりました
丁度宿は福住、お内儀は龜、娘は
鶴でしたから、

鶴龜の歸重ねて榮ゆらむ

山田をまもる福住の宿

とやつて漸く放免となり同伴の技
師と就寝しました、翌朝起きて洗
面の後、朝食をして居ましたら娘
の鶴さんがやつて来て又書けとの
事でしたから、さうせこうなりや
の積りで、

緑りなす松の木かげに宿かりて

鶴の一聲聞くぞ嬉しき

とやつてのけましたら、それから
何も書けと云ひませんでした何々

◇

まことに出鱈目相済みません、但
し次回には同郷の奇人のことでも
大に御紹介しましょう。

永樂町人さん朝夕大分冷氣を感
ずる様になりました、丁度私の
頭の様に最早風霜も間もない事
と存じます、さて鑛業會の徳野
さんから私にも何か書けとのお
話を受けましたが、何分頭が古
く新しい而も名士を網羅せらる
ゝ貴誌を汚すに忍びませんし、
又其資格は勿論何の材料も持つ
て居ませんから今日迄御遠慮し
て居ましたが、昨夕御客を致し
まして今朝宿醉の時徳野さんか
ら電話でお責めに預りましたか
ら、更に麥液を傾け茲一番と元
氣を出して見は致しましたが、
さて材料はありません、そこで
致方なく一昔前の滿洲行を少し
計り書かして頂いて、何處かの
端に載せて頂きませう。

◇

大正六年の秋でした遼東の舊跡を
訪ふて見ました時、御存知の海洲
城頭を過ぎまして其荒廢に驚き且
つ傷みました事がありました、其
時例の驢馬に乗り城壁を巡りまし
た、丁度今の様に南北紛争の時で
したから鞍上頻りに無量の感に打
たれました。

隣邦訪舊跡、想南北干戈、

馬上遼東旅、荒墟掩淚過。

の五絶をものし大連、旅順を経て
鞍山の鐵鑛を見物しまして奉天に
同胞埋骨の跡を偲び、歸途安東縣
に立寄りました、そうして採木公
司式村さんの御紹介で領事、民團
長、警察署長等の名士と董事に酌

月 百 首 (その一)

李 王 職 末 松 熊 彦

新 月

立出で、見るも珍らし夕間ぐれさゝの薬越の三日月の影

弦 月

きら／＼と星の光の數ましぬ弓張月の入り方の空

停 午 月

眞夜中とははなりぬらし久方の空のなかばに月宿り見ゆ

有 明 月

天の戸のあけるにつれていつしかも光消へ行く有明の月

曉 月

大方の秋はなかしと聞きしかど曉月ぞかきりなりける

殘 月

朝まだき柴の戸出で、眺れば片山の端に月ぞのこれる

は仕方がない、とら／＼眞向から

謠 の 話

殖産銀行 深尾道恕

時々松本君が私共の室に狸窟をあらはす、其の度毎に原稿の督促をされる、恰も貸した金でも取る様に、此の間は又雑筆で迄體のよい催促だ、しかたがない借りた覚えはないが、借金を拂ふ積りで何か書かう。

謡曲には中々面白いことがある、坊主と幽霊が付き物だ、昔は随分執念深い人が多かつたと見えるが、又高僧知識も多かつたと見えて、執念深い亡魂も悉く坊主の體經に妄執を拂ふて難有く成佛する、割合に淡泊な幽霊ばかりだ、こんなことを書いてもきりが無い、私の一寸面白いと思ふ曲の話をしやう

烏帽子折と云ふのがある、牛若丸は金商人吉次に伴れられて鞍馬の山から奥州に下る、謡曲の普通の筋から云へば、人商人に扮はれて行儀不明になるのである、木母寺の梅若の様に隅田川の畔迄連れられて、母親の班女は搜索願も出さず、氣違ひとなつて後を追ふ譯であるが、何しろ牛若は遮那王と呼ばれて、鞍馬山中を荒した不良少年だ、自發的に吉次に喰つ付いて奥州へ下向した、途中美濃國の鏡の宿で、さる烏帽子折の翁に烏帽子を折らせ、自分自身で勝手な元服をした、然し落人の牛若には烏帽子代を拂ふ丈の持ち合せがない止むなく自分の佩刀を金の代りに

差出した、落ちぶれたりといへど名門の子息である、其の刀は流石に立派だつた、烏帽子折は大悦び女房喜べと云ふ譯で、早速其の妻に刀を見せると、妻は驚いた、之は見覺があります、こんねんどうと云ふ刀に違いない、何を隠さう私は鎌田正清の妹です、其の昔牛若君御誕生の節、義朝公から守刀として若君に贈られたもので、其の節私がお使に上りましたと云ふ此度は翁が憐れた、『何と鎌田正清の妹と仰せ候か、此の年月添ひ参らすれども、今ならでは承らず候』と云ふ一節がある、此の時代戸籍法も充分行はれなかつたと見えるが、それにしても随分呑氣な夫婦もあつたものだ、想像するに之は出来合夫婦らしい、聞き合せも何もあつたものでない、云ふ言葉こそ上品だが、今日では全くバラックの急造夫婦だ。

牛若は遂に赤阪の宿迄到着した、すると此の地方の盜賊熊坂長範は吉次の荷物に目をつけて宿を襲撃した、名前ばかり強そうな子分が攻め入つたが、不良少年牛若は飛鳥の如き早技で片端しから引導を與へた、熊坂も流石に一寸躊躇したが『いや熊坂の長範が今夜の夜討を仕損して、いづくに面を向くべきぞ』と大將らしい覺悟を決めて、残念ながら斬り入らねばならなかつた、牛若の秘術にかかつて

は仕方がない、とうとう真向から割りつけられて、二つになつて成佛した。

私は熊坂が氣の毒でならぬ、小六は矢はき橋の上で日吉丸に逢つて遂に大名になつたではないか、辯慶は同じ牛若に五條橋の上で弄ばれた擧げ句、屁股の巨となつたではないか、牛若も少しは親切氣を出して、何とかしてやつても好きそうなものに、二つにするとは無慘至極だ。

貴族院に熊坂侯爵の名が見えないことゝなつた、然し當時熊坂は六十三だ、敏捷な牛若は將來自分が安宅の關を破る時、乃至は衣川の柵を最後とする時迄、到底辯慶の様に連れ廻はれないことを直覺した爲めであるかも知れぬ、老人程氣の毒なものはない、お互に年は取りますまいぞ。

仁川半日記

平田久雄

この間仁川に遊び、いろいろな人や家を訪問したが、吉田(秀次郎)さんのお住居と、そのにこやかな應接振りにはすつかり感服させられた▲吉田さんの邸は、第一位置がいゝし、もとは某外人の住居だつたとかで、窓取りの具合といひ、裝飾といひ、展望といひ、申分はない▲それから主人公は仁川の元老といふから、例のむつゝりした威張つた先生だらうと思つたら、非常に物やわらかな體態な人なので、逢つての氣持が馬鹿にいゝ▲亦た吉田さんのお歳(イヤ容貌)の若かいのも、私には非常に意外だつた。

海樓雜筆

殖産銀行 守屋 徳夫

【三〇】

二、涼味

午後五時、自動車のわめきを殘して頭取銀行す、階上階下今は職員點々日中の雜沓既に去りて唯紙片の床上に散亂するを見る、夕陽きららかに窓を射て餘光机上に斜なるに忘れられたる扇風器の一しきりうなりを高めて人なきに動くも寂し、銀行の大伽藍今し禪堂の如く靜かにして涼味風なくして先心より生ずるを知る、やをら立ちて仁川に志す。

五時四十分三等車の一隅に設けられたる二等車に乗る、乗客割合に多きと汽關車に近くして紛炭の飛來夥しきに一たまりもなく次の三等車に逃げる、腰掛の簡素にして寄かゝりの木なるはよし二脚一人平均に占領し得るに至りて一層暢達を覺ゆるもうれい。

永登浦を過ぐる頃より稻田十里に連るを觀る就中富平附近の曠野最も愛すべし萬頃青風にそよぎ白鶴舞ひ來りて長頭を塵間に抽ずるあり夕陽西山を染め餘光車窓に輝けども遂に熱を成さず田園の涼味漸く湧いてそよりに郷國の沃野を懐はしむ。

靛靛に下車し綠陰をたどりて各國公園の山上に至れば右月岸島の清楚と江華島一連の淡影をのぞみ左八坂の鬱林を透して文鶴鷄吾の鳥山を見る暮色蒼然として港内をこむるに七箇の燈火星の如くにして交互に明滅するも面白し。

海風吹いて盡きず樹々清爽の響あり都廳既に全き去りて肌漸く寒きを覺ゆるに急ぎ中腹の寓居に入る三層の高樓ひややかに簾を、窓布翻飄として涼風を滿喫す、浴衣に著代へて横臥中空の月明に對し漢々銀河の千里に流るゝを見る、涼味茲に至りて全きを知る。

一、音づれ

浮き世に意を斷ちて遁世したりといふ程にはあらねど日に増し細り行く身の末も悲しく先は夫位の氣持にて都を遁れ來し身に憂きは電信電話談々の音づれと思ひしこそおろかなりける、

おとづれの絶えて無き日はまろびるて新聞紙など繰返し讀む二三日が程こそ海に山に見る目新しく人の便りなどもとより心にもかけず一管の釣竿に或は船に或は棧橋にひねもす漁り歩きつるが今は新聞紙さへ待たるゝ身となりしぞうたてき。

捨て置きし友の音づれ探し來て繰返し讀む夕は寂し實にや半ば讀みて顧みざりし端書などの繰返し讀めば又其の度毎に新なる味の湧くなる、人なつかしき夕への早や幾日か経ぬる、

『一日も早く御全快歸歸京の日待上居申候……左團次乗込みも近づき一層待たれ申候』など月並の文句や手管とのみ讀み去りしことのおろかさよ、よき人々の思は胸に餘れどこの外言はん術を知らぬもあるべし。

『日に増し元氣御旺盛の由大慶に存候呑氣に御壽養祈上候……仁川の連中は何れも極端なるザル黨の集合なれば貴公の御手並を以てするも尙多少幅がきましことと察上候』云々

讀み行く間に其の人の面持など自ら浮み出るも面白し、この人福相

に富み給へば床の間なる畫幅よりぬけ出で我に物言はるゝ如く思はるゝもなつかし。

仁川の御居常は〇〇先生を捉へて團膳三味との趣これ亦至極蒲閑の要諦と被察御尤も至極に存候、さり乍ら御上達覺東なきことと確信罷在候、東京にて〇〇君が小生に一度團膳を挑み候、

先生は自ら勉強せりとの自信ある故二目は置かずと申し候へ共小生は格式の基は格別なり若し二目を置かざれば永久貴下と相見えざるのみなりと申候處先生も其の頑愚に呆然たりし様子に御座候、貴下とても同様如何程上達されても小生との對局は萬年の二目なりと御觀念下され度然らざれば打たざるのみ』云々

左團次の忠嚮を思はしむる主人公の風物目にちらつく心持す『打たざるのみ』に限りなき味あり此格式よりせば本因坊も物の數ならず待べるもの若手〇〇以下數名南山月清くして感興盡きず將來かゝる宴席には缺がさず御出席下さる様切に御恢復祈入候。

全快はそも何れの日なるぞ、もるにてもうれしきは音づれなる哉、古人も月よよし夜よしと人に告げやらば來てふに似たり待たずしもあらなくに

と詠みぬ、待たずしもあらなくに徒らに日は過ぎけり。用務のまには『是非御都合の上御家族同伴御來遊待上居申候』など眞心より書き添ふる情なりしもあはれならずや。

京 城 雜 筆

朝鮮語の日本化

——日本語は既に大分朝鮮化した——

朝鮮語研究会主幹 伊藤 韓 堂

朝鮮に萬歳騒ぎが始つて間もない頃、例の吉野博士であつたかと思ふ『これから朝鮮人の併合が行はれるのだ。明治末季の韓國併合はアレは國と國だけの併合で、朝鮮人の併合はこれからだ』と喝破した。その所謂『朝鮮人の併合』なるものは、大方日本人の同化運動を指したのであらうが、私は朝鮮人の併合は兎に角、朝鮮語の併合が行はれねば駄目だと思ふ。

國家の主權に異動を見たからとして其の固有の言語は決して衰へるものでない。否、寧ろ特別の意味に於いて榮へて行くことすらあるものだ。この半萬年の歴史を有し文化を有する朝鮮同胞の言語が、非常なる、敢て期すべからざる事件にブツ突からざる以上、決して衰退するものでない。然らばこの特殊の地位を占むる朝鮮語に對して如何なる對策を爲すべき乎、私は『我々日本人は日本語たる國語と朝鮮語との間に融合點を見出し、極力の其の融和合一を圖つて行くことに努力せなければならぬ』と思ふ。

朝鮮同胞側から見た日本語は、近來社會上緊要の地位を占めて來た第一朝鮮人計りの宴會や會合でも特別の事情なき限り盛に國語に依つて交歡されて居る。今日では國語を解すると否とに依つて其の人の運命の定まる時期は既に去り、其の操ることの巧なると否とに依

つて榮枯を岐つ時代になつて來た而も單に生活上の必需品、收入増加の手段、社交上不可缺の用語となりしのみならず實は朝鮮の人達は日本語の若干を朝鮮語中に加ふるにあざれば完全なる思想の表現に困難を感じる様になつて來たからである。換言すれば今日の時代に於いては本來の朝鮮語が益々不足し出したからである。近年朝鮮の人達は日本より來る文化の移入に依り夥しく譯語の不足を感じて居るからである。故に日本語は遠慮會釋なく朝鮮人の腦中に入り語彙に入つて、遂に朝鮮語としての日本語が同胞の口から出つゝあるのである。今や日本語の若干は立派に朝鮮語として其の辭典に登載さるべき資格を持ちつゝあるのである。

日本語と朝鮮語の『融和合一』とは相互の言語融合つて一となることである『アナタいりおしよ』でも構はない。『タンシン行つてください』でも差支ない。相和して一を爲し而して耳に觸はらない程度まで訓練されるれば、乃ち此に融合の一語を作す譯である。今日の日本語でも何國の國語でも決して擧國以來から持つて生れた言語ではない。外國の文化を輸入し來れば言語の附隨は避くべからざる事である。現に我々が少しも氣の著かないで居る日本語の内に數千數百の朝鮮語が含まれて居るのだ、

それは唯單に朝鮮語許りではない唐語もある。琉球語もある。イヌパニア語もある。葡萄牙語もある和漢合成の熟語もあれば、漢和熟語も澤山にあるのだ。決して日本語の朝鮮化、朝鮮語の日本化を忌み厭ふことはない。現に朝鮮側では朝鮮語中に無數の日本語を加へて而して少しも耳に觸らぬやうに訓練しつゝあるではないか。

朝鮮語の日本化を圖るには朝鮮在住の内地人各位が今少しく朝鮮語に興味を持つて呉れねばならぬ。少くとも我々は、一つ田の米を食ひ、一つ井の水を汲み、一つ番地に居住し殆んど共同の生活を爲しつゝある以上、朝鮮人と朝鮮語を餘り冷淡に取扱つてはならぬ。それだからとして別に専門的に學ばないでもよろしい。一つの趣味として、一つの道樂として暇々に朝鮮語と朝鮮人に親しむを持つやうにしたならば此の朝鮮語の日本化は云はず知らずの裡に歩を進め、遂には日本語の一部分として立派に取り入ることが出来るであらうその時こそ始めて日本人が朝鮮統治に成功する時であり、朝鮮が完全に併合された時である。

◆お別れの辭

關 根 重 憲

お手紙難有う、いよゝ／＼醫備日日に話が出来て、明日出發廣島に向ひます、在鮮十餘年大分退化してゐますから、果してお役に立つかわか、いざ朝鮮を發つことなると道に名殘が惜まれます、どうか御機嫌よく——皆様にも宜しくお傳へ下さい。(九月五日)

性と性慾に關して

朝鮮新聞社 野崎眞三

【二六】

◇種族の保存が邪惡ならは人間は絶滅してしまはねばならぬのである、故に私は正當にして嚴肅な性慾の顯現は決して罪惡ではないと信する。

◇親が子の前に於いても、教師が子弟の前に於いても嚴肅に話題に上せて毫末も差支ない。私は優生學の見地からも性慾教育は決して等閑に附すべきものでないと信じて疑はない。

◇裸體畫を取締るのは取締る官憲自身に春氣分があるからだ。巨匠ロダンがモデルに對した時、毫末の春氣分など有りやうが無かつたと思ふ。私は繰返して親達、教員達に性慾教育を高唱したいのである（一三、九、二〇）。

局長と看板

平田久雄

前の警務局長丸山さんが、この春平北地方を視察し、惠山鎮の或る宿屋に一宿に及んだ▲スルト土地でも有名なその宿の女將が伺候しきりに歡待優遇に及ぶ▲丸山さんいゝ氣色になつて一杯傾けて居ると、女將そろ／＼本音を吹き出した▲それは件の宿の看板を書けといふ陳情強要なのである▲丸山さん俄に泥醉の容態を發揮し、不得要領裡に明朝早立ちしやうと、ムニヤ／＼と横になり、ウマク狸を決め込んだ▲あくる朝眼が醒めると、早々出發のつもりで、フト枕元を見ると、チャンと硯、筆、看板がとり揃へられ、お搦けに女將がキチンとお御輿を据へて居るので、之には流石のおん大も兜を脱ぎ、とら／＼御前揮毫といふドエライ憂目を見たといふ。

にしたりした。其當時は日本語で書かれた性的の書籍は殆んど無かつた。彼の賣文家の澤田君でさへ性の著述は出して居なかつた。

◇同人の中には生殖器崇拜に關する研究の爲め關東一圓を行脚して道祖神陰陽石を蒐めた熱心家も居た、古今和漢の春書を蒐集したのもあつた。今日では左程でもないが二十年近い昔の事で随分私達は異端者扱ひをされたものである然し性と性慾の世界は探求すればする程神秘幽玄極らないものである。

◇何故なれば今日の料學でも受精即ち精虫と卵糸の結合の結果が雌雄何れであるかと云ふ事は全く偶然であつて何等之を科學的に闡明は出来ない。性交と受精の關係さへも人間の意志通りに遂行し得ない雌雄何れかを受精せしめると云ふ事は絶対に不可能事である。

◇我々は子孫存續の意味からも優生學の意味からもモット此性と性慾方面へ眞摯な科學的研究が必要だと痛感する。

◇基督は性慾を禁斷の木の果だと云つてゐる、佛陀も色慾を邪惡視してゐる、然し何故に性慾が邪惡なのであろうか。私は思ふ濡れ易い性慾に對する先賢の老婆心からの戒だ。

◇正當にして嚴肅なる性慾の顯現が何で邪惡であらうか。邪惡だとすれば我々の祖先は身を掩ふて鈴を盗んで來たのであらうか。

◇此頃でこそ紳士が公然と性や性慾に關した問題を話題とするが、私達學生時代には性と性慾の世界は神祕の殿堂で誰も之に觸れる事を恥ぢてゐた。聰明な母親でも兒童に手淫の害毒を説明し得なかつた中學校の先生が細胞の分裂には具體的な説明を與へたが動物の受精に就いては極く抽象的な説明しか與へなかつた。種族の保存と云ふ重大な意義ある性の方面を何故にお互が避けねばならぬのであろうか。

◇學生時代から私は眞剣に此性の問題に考察を進めた。そして性慾の世界を眞摯に探求し始めたが、然し此考察には毫末も春氣分は許さなかつた。——私達のグルーブでは遊戯的な享樂的な嚴肅でない空氣を春の即ち遊蕩兒が春畫を愛好する淫蕩氣分を極力排斥した異性を觀て、異性に接して私達が性的昂奮を感じるのには本能であるが春の興味を唆られるのは遊戯であり罪惡たゞとして來た。

◇そして性の研究に没頭した私達のグルーブの中には生殖器崇拜の齊藤昌三が居たし、有名な泉岳寺畔の二階裏に棲む平凡寺が居た。そして或る時は莫運な賣春婦の欺かざる告白を聴いて性のドン底生活の研究したり全國社祠にある陽物や陰陽石の展觀を催して生殖器崇拜の史的考證に耽つたり、又或る時は御互の性的昂奮、性的衝撃其他に就いて赤裸々な告白を統計

よ、問題は市中銀行や當行の窓

追憶一つ

京城日日新聞社 別府 八百吉

彼是れ六七年前の夏の或る夜であつた、朝鮮ホテルのローズガーデンの何かの會合に、私は京日の記者として出席してゐた。

『オイ銀行の奴等がトテツもない事を相談してゐるぜ』六尺ゆたかの大男、笠原三井物産副支配人が困つたらしい面であつた所に来て話しかけた。

『土曜半休——つまり土曜の午後を休もうと云ふ申合せなんだ、今日集會所で僕はチラツと聞いたが可なり進んでゐるらしい、日曜を控へた土曜の半休、コイツは一般にとつて非常の不便で大問題だぜ一つ打壞して呉れんかい』笠原君はかうつよけた。

私は財界として注意すべき問題だなどと思つた、そして笠原君から聞けるだけ聞いた、役所をまねた銀行の土曜半休、そこには論議すべき多くの餘地がある、その夜銀行の歴々も大分來てゐた、然し私は夫等の諸君にはわざと何事も語らず歸社した、今日の京日の社勢は順調らしい、が當時は不順調から順調に向はんとする過渡期であつて銀行の厄介にも可なりなつてゐたやうだし且つ鮮銀總裁は京日の權威ある顧問であつた、かたゞ餘り銀行に不利益の記事は遠慮せねばならなかつたのである、さうした事を考へ、各銀行土曜半休の議が進んでゐる事と、それを一般に不利不便だとの批難ありと

いふ控へ目の記事を朝刊に半段ばかり書いた。

翌朝早く社長の車夫が私を起した、車夫は一通の手紙をもつてゐた、私はお叱りかなと思ひつゝ開封して見ると、怪しからぬ銀行土曜半休の議の素破めきは實によかつた、大に鼓を鳴らして責めて呉れと書いてある、あつて気がついたのであるが、當時の社長は三井の高野支店長と頗る昵懇だつた、社長の私を激勵したのは高野君のためらしくもある。

兎に角、私はその朝度支部に理財課長の有賀光豊君を訪ねて此問題の可否を問ふた、有賀君は可否を明言しない、然し銀行側の申出でに對し明らかに内諾を與へてゐるらしかつた、恐らく長官の承認を得るといふ所まで漕ぎつけてゐたものだらう。

鈴木長官登壇の黒札が出た、私は移長官の望に轉じて意見を求めた威儀をつくつた鈴木君はどうも初耳らしく見へた『ホウ、金融業者は財界の血脈をもつて自任してゴザル、その血脈を半日も留めやうとは……』さう云つた前提で滔々とその不可を論じ立つた、私は締めたと言んだ、續いて生田商工課長の望に行つた、商工界のために面白くない事だと根強い反對である、朝鮮銀行に傳を飛ばした、故三島理事は餘り騒ぐなよと多くを言はなんだ、中村光吉庶務局長と故吉田營業局長は僕等はさういふも

よい、問題は市中銀行や當行の窓口にある、然し行員優待のためには必要な點もあると話してゐた、三井の高野君、鈴木君の小山君は素より絶對反對だ、私は本版で『銀行土曜半休問題』といふのをほらし連載の積りで、自分の意見や諸家の反對説を書き初めた『その計劃の破れるまでウント書いて下さい、中々好い』熊本辯の社長は云つた、若い私は油が益々乗つた。三日目の正午すぎ、此問題の筆を進めてゐると、鮮銀總裁から電話で來訪を求められた、早速行つて見た、白頭總裁は言つた。

『エラク手酷しいね、臆立ての出來かかつたのを君に蹴飛ばされた形だ、銀行の土曜半休、これは日銀や正金の先輩銀行は既にやつてゐる、又行員の健康のため休養といふ意味から、運動などの獎勵を加味しやうとするのです、然し大分反對も多いやうだし、我々は一應決議したのだけれど、時期尙早の嫌ひあり延期する事となつた、で新聞の攻撃記事は止めて呉れたまへそして此僕の話を書いて欲しい』さう話つたニガ笑ひした事の妙に至るまでには内部に色々の経緯があつたらう、然し血氣の私は一種の快感を滿喫した。

× × ×

それから十四五日してからだ、新聞記者の嗅覺に全く觸れず『自今營業時間を午前九時より午後三時までとす』といふ各銀行の廣告が新聞に出た、從來午後四時までの營業を三時までに短縮されたのである、それは絶對秘密裡に、各銀行は當局と協議の上決定發表したのだつた。皮肉な勸諭！快感の滿喫から苦汁の滿喫……さう云つた氣持を私は二三日味つた。

銀賣買の話

安取監査役 中村 巖

てゐない。
今年の秋相場は更に一段の昂騰を示すであらうか其れとも轉して反落期に入るか何人も容易に豫測し難い丈けそれ丈け市場は多大の興味を繋いでゐる。

六、繋ぎ商内

京取市場に於ける大新の繋ぎと同一の仕方が無論銀市場にも行はれてゐる。大連鈔票を買つて安東銀を買付ける如きは最も普通に行はるゝ繋ぎ商内である。

相場の動き工合は大連が漸進的であり安東は反能的に高下する。

故に兩地間の鞘開きをねらつて仕掛け同鞘のときに兩方同時に手仕舞するといふ駆引。或は安東にて上海爲替を買つて定期銀を賣り大連にて鈔票を買ひ之を上海爲替に換へて上海にて決済する如きは爲替問屋の仕方である。

或は天津、山海關、營口、奉天、鐵原並に芝罘の爲替相場に依つて安東銀を買買する者もあり豆粕木材等の手持商品を賣抜ける代りに銀を買つて繋ぎをとる者もある。

安東大阪間の金爲替を大阪上海の銀爲替を利用して鞘取りをやる者もあり現物を買つて定期へ掛けたり現物を借りて支拂に充て其の代りに定期で買つたりするものもある以上は要するに比較的安なる投資方法又は危険轉嫁の方法として定期市場を利用するのである。

斯様な譯合であるから滿洲に於ける銀の賣買は支那が銀本位を改めない限り又日本が金本位を維持する限り決して廢滅すべきものでないのみか、市場の機能が完備するに従つて投機的取引をも包擁するから其の取引は年と共に繁榮すべき傾向にあると信じてよいと思ふ(完)。

五、銀價の大勢
世界の銀相場は倫敦市場に支配せられてゐるといふも過言ではない御承知の通り英國は南阿に最大の金鑛を有つてゐる關係から、自然に金塊市場を支配する。これがやがて銀塊市場をも左右する所以であると考へる。

歐洲大戦中は此の中心市場は一時紐育へ移つたが今は舊に復した。尅で一寸最近の相場の傾向を語らう。東洋方面に於ては昨秋日本に大震災があつてより金銀の比價は殊の外大なる波瀾を起した。震災後直ちに起つたのは日本金票に對する恐怖賣であつて、滿洲各市場とも金の暴落、銀の暴騰であつた然るにこの一時的の恐怖は忽ち反動を惹起して年末まで銀の反動安を見せたが此時は日米爲替の相場が實に著しき低落を示したときであつた。

日米爲替の低落は最初に上海の標金相場を崩落して次に大連鈔票を揺かし遂に安東市場も其の一高一低に影響せらるゝに至つた。

此間倫敦銀相場は長保合を續けた。昨年十一月下旬から本年四月まで三十四片臺に居据はりて只管凡調を辿つた。偶々四月中旬以後に至つて露國が銀貨の鑄造を倫敦

でやつて居るとか、獨逸も銀貨本

位に變るとか、バルカン諸國も銀

貨の鑄造を始めるであらうとか廣

東の造幣廠が復活するに就て臺灣

銀行が銀塊の供給を一手に引受け

たとか、いふ報道が一時に傳えら

れた。其れから銀塊は腰強くなつ

て三十五片臺に上り紐育から倫敦

へ百八十萬オンスといふ大口の輸

入があつたのも此頃であつた。勿

論安東縣は前述の銀高も響いた。

のみならず安東特殊の材料が潜在

した爲めに銀高の傾向を一層強か

らしめた。其の材料とは去年の秋

から問題にされた銀小切手の整理

で實は支那側銀行が銀の貸出を止

め只管貸付の回收を力めたのであ

る。元來鎮平銀の現物は六十萬兩

内外にまで減少してゐた所へ銀行

が貸付を止めたのであるから市面

に流通する鎮平銀は日を逐ふて減

少し金融は極度の緊縮を示して來

た其れにも拘らず日本の貿易商は

物資を輸出すれば必ず其の少ない

銀を買取つて物資の決済に充當せ

ねばならぬ。茲に於て銀は一路昂

上するのみであつた。即ち銀千兩

の相場は去年の十一月一日に金壹

千二百〇一圓なりしものが今年の

八月一日には千八百二十七圓まで

昂り尙ほ未だ天井打ちの形を作つ

行 雲 漫 筆

大日本ビル
京城出張所

川 上 健

夕食を待つ間二階から南山を眺める、秋の澄み渡つた空にも雲が徂徠して居る、今日はどうしても雑筆に雑筆を書かなければならぬが、さて書く手は持たない、題材も見當らないから、さしあたり雲といふことを考へて見た。

氣象學上では雲を形態に依つて巻雲、積雲、亂雲、層雲とかに區分して居るが、我々には何の興味もない。

雲を題材としての詩歌、文章はあまりないやうだ、漱石の句集の中では、

峯の雲落ちて筧に水の音
東風吹くや山いつばいの雲の影
白雲や山又山を這ひまはり
などがあるが、得意の作ではあるまい。

辭典には『水蒸氣冷集而浮漂空中者』とはあれど、何等の共鳴も有ため。漢語の雲、鮮語のクム、英語のクラウドは何となしに連絡があるやうだが、言語學の探究はその及ぶ所ではない。

雲の出典をザット討めると、

説 文 雨云象雲回轉形

易 經 雲行雨施

後 漢 雲軍十餘丈蔽臨城中

論 語 不義而富於我如浮雲

顧凱之 夏雲多奇峰

史 記 其乘風雲而上天

范成大 天末稻雲黃

とある、その外熟語には青雲、沈雲、油雲、煙雲、殘雲、凍雲とかマダクある。

私達の心はときどきに苛ら立つ、

或る婦人の言葉

本町三丁目
しらす屋主人 安達清太郎

或る日のこと金光教會にお参りして居ました、恰度そこへ一人の婦人が参詣されました、教會の先生にお話しされるのには、私は昨夜泥棒に這入れられて著物や髪道具を持つて行かれました。

『誠にどうも難有御座いました是は輕少でありますが神様へお供へ下さいます、よろしくお禮を申し上げて下さいませ』

尙泥棒の爲めにも本人の先行きの好い様にお祈りをして下さいと云ふのであります。

教會の先生は、それは誠に、好いお蔭でありましたと云はれて、前に暫く御祈禱をされて居られました、ハタで見て居ました私には何の事やら一向譯が判りませんでした、お祈りが済んでから私は先生にお尋ねしました。

先生の曰く、只今の婦人はあれで救はれて居るのです、大抵の人はこんな場合、自分の不注意であつ

どんな時でも、さわやかにありたいが、さておろかにも怒りを事物に移すことが往々ある、迷妄のなやみに捉はれた時である、自分は心の平靜を求むるが爲めに——心の雲を拂ふが爲めに自然に親しむことが好きた、自然の雲は文學者には何と映するか、文獻の微すべきものがあつたらと心がけて居るが、つい見當らない——江湖博雅の士の高教を仰ぎたいと思ふ。

(九、二三)

た事は少しも言ひません、そして無暗に人をのみ追究するのであります、自分の欠點には氣が著かずに人計り悪いと思つて居ますから亦二度も三度も失敗を繰り返す事があるものです。

只今の婦人は自分の不注意であつた事を深く恥ぢて居るのであります、そして、神様からお戒めを受けたものと感して居るのです。

それで將來決して油断もしませんでせふし總へての上に過ちのないやうに氣を付ける事が出来るのであります。

泥棒の先行きの好い様にと云ふのは彼れが本心に立ち歸り眞人間となつて正道を歩むやうにと云ふ事なのです。

あの人は信仰の力によりて『自己を顧みる』餘裕が出来たのでありますと。

誠に好いお心懸けだと感心致した事がありました。

小草の花

蝶炎 今村 鞆

【三〇】

居る……之は少々奇抜だ、併しどギアイヤの崇高もなければクレネバトラのローマンスも無い。

◆一人の女が通り越す、年の頃二十七八豊満なる肉と魅惑に輝く眼の持主である、淫蕩のうわ塗を妖艶で隠して居る、察するに黄金の籠に飼はるゝ極樂鳥が美貌を旗印にした息抜きの示威運動だ……コレハ確かに本ブラの立役者だ……五六歩離れて後を行く、往交ふ男は言合はしたかの如く、何れもが意味ありげの一瞥を授ける、其等の顔面の閃きは何を語つて居る？曰く刹那の陶酔モーメントの失戀假想の拘攣、高激の遠慮……人は犬より巧慧である、女は雛で貴金屬のウインドシヨウへと、悪の光か悪の輝きに融合する。

◆薄暗き廣場にコレラ菌のコロミ一狀に人の固まりが形成せられて神聖なる善の光りが受賣人の手によりて撤布せられつゝある、其所には聖者の足音も影も無い、唯骸骨と寒冷あるのみである。

少し隔つて陶器の競賣がある、鉢巻をした面貌の苦癡した男が膳の上の皿をガチャ／＼と鳴らし、

此皿は上等品の捨賣タツタ三枚、残りが無い、コリヤ買はんかつ同じ皿が足の横に澤山積んであるコリヤお前達は平素鍋釜から物を喰ひつけて居るから、生れてから皿と云ふ物を見た事があるまい、よく見とけ便利な物だ、豆を入れても漏らんぞガチャ／＼

随分人を喰つて居るが眼は隼の如く機敏に働いて居る、生活に直面して居る丈に眞剣味がある、其押賣の險惡を出来合の藝術で調和して居る。

◆随分とテクツタが御蔭で少し腹が北山だ、今晚は合憎く『奇抜』

◆役所歸りの途すがら、電車の中

で京城雜筆を披き、十月號には奇抜なユーモアに富んだ物を書いて見度いと考へて居る時、二人の視學官が入つて来た、互に挨拶の末此の雜誌に何か書いて遣つて下さいと雜筆を手に渡すと、兩氏はザットト通り目を通した後、

甲 之は隨筆の展覽會ですネ。
乙 大人の童謡集だ大人が御月

様丸いとやつて居るんだ。
成程ネ——矢つ張教育家らしい見方だ、併し平凡で面白い。

◆宅へ歸ると、夕飯後左團次の一
行と共に撮つた寫眞が郵便で届いた、一同鳩つて之を見る、萬事江戸前の零夫人曰はく
イーネー！此著作の著こなしが
スナナリとしてキチンとして何とも言へませんネー。

頭を心もち傾け變なアクセントで
頗る御感に入つて居る、又曰く
貴方は雜筆へ藝術の著こなしの
悪口を御書きになつたが、御自身
の此著様を御覧なさいネ……

と指で示す、成程よく見れば寫眞
中の自分は、少しもスナナリと仕
て居ない『著作の著方』是も一つ
の藝術だ、ダガ『簡單の尊重』と
は相容れぬ、繁劇なる生活は藝術
味を驅逐する、都會の俗態化は止
むを得ない現象だと考へて原稿の
ことを思ひ出す、其俗惡の裡より
奇抜とユーモアを生捕つて來よふ
と、浴衣がけで本ブラと出懸る。
◆街通りには閑人遊子が盛に出る

矢つ張此所は公園だ、木と石との
公園でなく女と男と店の公園だ……
目には見へねど早既に秋が洗れる
空は自から色變へて、道行く女の
帯も締め浴衣吹く風は涼しきに過
ぐる、所々燒栗屋が出る桔梗女郎
花が賣らるゝ……杯と文藝の隠亡
である古臭き俳歌人が唸るであら
ふ、大脳皮質の乾燥せる哲學者は
唯電子の動搖とのみに映るであら
るふ、左傾せる未來派の畫家は幽
幻なるリアクシヨンから心臓の踏
舞と火焰の鼓を雜多なる三角形に
描くであるふ……

向ふから犬を負ふた年増女が来る
時々顧みて犬に話をして居る、人
は笑へども女は本氣だ……アレは
人間だ小供だ、錯覺に陥れる事に
依りて人生の孤獨を忘れたる幸福
なる年増女よ……

頭が少しフアンシーになつた、そ
れを平凡へと喚び醒したのは、人
の怒號する聲である。
見れば鮮人同志の喧嘩のト幕で
ある、内辭語をチャンポンにして
互に罵り合ふ中一方が
貴様は日本語が出来るぢやない
か、ナゼ初めから日本語で言は
んかッ馬鹿ッ。

とやつた、此の反對現象に少しく
面食つて遊笑しつゝ歩む。
又人だから、見れば人々の顔に不
安の色がある、何事かと聞けば、
ドブの中から蟻が如く／＼鎌首を
擡げて續々這ひ出す……腹屋の粗
忽であるふと憤慨してビク付いて

も『ユーモア』も不漁だ……。店頭の稻荷餅と腹の虫とが窺かに囁き合ふ……。あの三角の形には幾何學的藝術と努力の經濟が表現されて居る、其元祖は恐らく埃及ピラミットの考案者と發明意識に共通の泉がありふ……。案すれば日本人程藝術の豊かな天分を持てる人種はない、住宅衣服器具食物は勿

太刀魚を拾ふ男

朝鮮信託常務

桑野健治

論さては泥棒を食にまで藝術の具ひがある、洒脱なる藝術の社會的畏懼是れが日本人の誇りである。◆效まで書いた——歸宅して蒲團の中から龜の子の様に首を出して——行數の制限から中止を命せられた、丁度夜半に藝者が三味を鳴らす様なので、近所迷惑だと考へ筆を擱く夜寒むの床には睡魔が待つて居る。

炎天の下、焼けるが如きコンクリートの突堤を尻端折りに足袋既足釣竿を肩にして月尾島へ急ぐ今様太公望あり、其名をM君と申す。

汐の満ちぬ間に何時もの漁場に行き着かうと、側目も振らず眞一文字、一筋道を尻つびり腰をしてテクル眼先にピカリと來た一物があった。

突堤の下、汐の引残つた水溜りの中に此のピカリを發見した今様太公望のM君は、今一度眼を据えて其のピカリを凝視したが、ヤガテ一目散に石垣を駈下りて水溜りに突進した。

鹿を追ふ獵人山を見ずと云ふ言葉はあるが、此時のM君は、魚を追ふ漁師海を見ずとでも云つた有様で、泥濘膝を没する瀉の中を遮二無二進んで水溜りに近付いた。

間近く寄つて水溜を見てあれば、

中に響くピカリの正體は千潮時に逃遅れたる太刀魚の一尺五寸計りなるのであつた、是を以つて惟ふに太刀魚の名は如斯ク遅れたる魚なるの意より起れるものに非ざるか。

閑話休題、此太刀魚を發見したるM君は歡喜雀躍、天の恵みかチェー一忝けないと計り、携えたる釣竿を持つて此方へ掻寄せんとすれど其處はソレ對手は生きもの仲々にM君輩の手におえたものでは無く、此處迄おいで甘酒進上と逃げ廻る頭を突出し儘ならぬのをもどかしがつたが、其内に突堤の上は黒山の如き人だかりに今は拔差しならぬ破目に陥つたM君、打物は面倒なりと釣竿を擲つと共に水溜りへ這入り込むだ。

水溜りは意外に深く乳にも及ぶ程であつたが、騎虎の勢今更何如ともする術なく、衆人環視の内奮闘努力の結果兎も角も太刀魚は捕

ふ？否拾ふ事を得たが、蓋し其時の恰好は風呂の中に取落した石鹼を拾ふに彷彿であつたと云ふ。

それは儲け思はざる獲物を得たるM君は、見物人の歡呼を浴び乍ら意氣揚々、得意満面、先づ其日のプログラムを變更して引上げ、知人の誰れ彼れに獲物の披露に及んだが、中に何事にも一言無かる可らざる口の悪いのが

『多分其太刀魚は嗜眠性腦膜炎にかゝつて居たのだらうよ』と半疊を入るとM君はげしく眼をしばたいたが口を歪めて苦い顔をした。

◆珍聞貸家札

吉田 莊 一

大正十三年は九月廿一日未明の出來事である、京日の河谷さんの僑居の支關に墨痕鮮かに『かしや』と貼り出されてあつた、第一に發見した家人屹驚して急を主人公に訴へる家族會議が初まる、各見解を吐露する、凡百意見を綜合して主公斷案を下して曰く『之れはいたづらだ、白水に誦話を掛けて御覽』との御託、依つて白水を呼ぶ電話口に出た仲居梯笑ひこけてまかり下る、果して然り矣、爾來訪客ある毎に河谷さん、之を披露する事詳細、而して其理由とする所を聞けば『其の前夜京喜久で不良二人頻りに今生き佛の稱ある僕(河谷氏)を誘惑せんと鼠めたが、果さなかつたので結局密使を放つて皮肉にかしや札と來たわけだ』と而して其不良二人とは？と聞けば電通の吉川さんと社の不案考さと、但し以上は原告河谷さんの申立である、不良と銘うたれた兩君の辯明を求むるものである。

金剛山漫筆

滿鐵旅客係主任

佐藤 作郎

一
昨年の冬故人となつたが、金剛山の山案内者にAと云ふ名物男があつた。彼は素と長箭の港で、汽船の乗降客や積御荷物の運搬をする馬車を稼業として居た、彼は或時港の裏の岩山登りする某名士の供に傭はれたが其名士は非常に山を賞讃して歸つていつた。其頃そうした傭はれ手となる内地人は近郷に彼より外になつたので、其後時々傭うした山登り客の供を彼は頼まれた、そしていつも客達は山の雄大と谿の幽邃を賞めた、へて歸るのであつた。彼は日々願ひもしなかつた風光を嘆稱されていつとはなしに山案内者を稼業とする様になつて仕舞ひ、昨年で足かけ十幾年かを過して來たのであつた。生前彼は常に傭う得意で語つて居た。『内地人として金剛山の草分けは俺だが、十年前寺内總管閣下が探勝にごさつて以來山の路が大分良くなり、探勝客も年々多くござる様になつたが、其以前と云ふものは、俺の様な山を道樂とする風流猿が年に二三人も見えた位のもので……』

二
山案内業を道樂にすると云ふおかしさ又十幾年の經歷を以て金剛山の草分けと自任する無邪氣さと性格の世話好きから彼は多くの探勝客に可愛がられて居た。

三
金剛山を語らんとして先づ案内者Aの經歷に始めるのは他なし、我等内地人には爾く金剛山は新しい名勝地である事を示さぬ爲めである。然らば金剛の景勝はいつの頃に朝鮮人に發見せられたか、夫れを明瞭に答へ得るものは恐らく一人もあるまいが、外金剛嶽帖寺が新羅南解王の時五十三佛を迎へて建てられ、内金剛長安寺が新羅法興王の世眞表律師の創建だ、と記録にあるから、金剛景勝の發見も寺と同時に新羅初期千七八百年前と見る事が出来やう。但し私は寺の創建時を直ちに景勝發見の時だと斷するのではない。日本内地の靈山深峽の探見が多く行基、弘法、圓空など佛徒によりなされて居る處から推して、金剛山の發見を佛の傳説と結び付け考へる事は甚しき不都合であるまいと信ずるのである。

千數百年の歴史ある隣地の名山をつひ先頃まで氣膺かなかつた日本人は、餘程山岳趣味に盲目の國民と云はねばならない。文祿の昔川藤清正が金剛山楡岾寺の山門に『此きに高僧あり犯す勿れ』と掲げた記録を我等は見て居るが、其寺背に天下の絶景ある事を無關心で過して來たのである。げに日本アルプスの勝がウォルター、ウェストン氏の『ジャパン、アルプス』で世に紹介せられた如く『ダイヤモンド、マウンテン』の名は英婦人ミセス、ピシヨップの著書により我等より先に外人間に有名になつて居た。千九百十年の秋、上海のミセス、ゴールドンは倫敦の地質協會で朝鮮金剛山の幻燈寫眞を映寫したと聞いて居る。千九十三年版のフキリツプ、テリー氏の『ジャパン、エンバイヤ』にはもう朝鮮金剛山の記事が載つて居る。

四

清酒に『金剛』あり、煙草に『金剛』あり、菓子に『金剛飴』『金剛饅頭』摺附木に『金剛山』ある迄、今金剛山の名は我等の間に膾炙して居る。又朝鮮を通過する旅客の誰も口から、日子さへあらば金剛山へ行つて見たい、と必ず聴く事程有名になつて居る、然も朝鮮在住の人にして未だ此名山の土を踏みし人寥寥たるは何うしたものであらう。其人達を悉く毎年春夏秋冬三季を通じ僅々三日乃至一週日の餘暇を見出し得ぬ多忙の人達許りとは思ない。或は山の勝手不案内からつひ探勝を躊躇して居る人達が多いのではあるまいか。若し夫れとしたり、私は進んで其人達に山の説明をして差上げたい、又手元にある參考印刷物も捧げたい、そして朝鮮が有する唯一の世界的なものを諸氏と共に大に誇りたい。

五

金剛山への交通は内金剛方面は汽車から自動車、外金剛方面は汽車から汽船と些の勞苦なく僅か二日程を以て達し得る様整つて居る又山中にはホテルあり日本旅館あり寺院宿泊所ありて、旅舎にこと缺なき設備がある。されば日子三日間の餘暇あれば、往復京元線夜行列車を利用し、玉流溪、萬物相、海金剛等金剛山代表的景致の探勝が出来る。若し其費用に至りては、朝鮮線主要驛にて發賣する單獨三割團體五割引の探勝往復券を購ひ、京城から溫井里往復船車賃三等八圓十錢（團體は一人當り六圓七十錢）溫井里宿泊二夜七圓其他雜費五圓と見積り、僅々二十圓の總費額で事足りる。蓋し金剛山に三日の日子と二十圓の費用を吝む人は趣味の人でない。私は巷間、金剛山の探勝には日子と費用が大分要するとの話を耳にする毎、世界的金剛山の紹介を爲す前に、先づ朝鮮内に金剛山を宣傳する時期に未だあるを痛感する。

鱸釣らざるの記

朝鮮銀行 飯泉 幹太

ソウコウする内に二時に仁川驛に降りた。『達營』と云ふ釣船屋の親爺が迎ひに来て居て今日は確かに五十尾は大丈夫だと更に油を懸けてくれた。コウなると僕等は船が出るのを待つて居るのがモドカシクつて堪らなくなつた。そして餌を曳く響さへ右手に感ずる様な心持になつて来た。高橋君は常得意のこととて今日進水したばかりの新造船を提供されたが僕等は舊造船に乗込んだ。一行は二時半月尾島を左に見て逆風に帆を孕ませ干潮を追ふて港外に出たが船足が遅くて仲々進まない。僕は日露開戦當時八尾島沖の海戦の實見談を試みた。ミスター、モリヒラは『君は朝鮮には随分永いのネ』と吃驚した。高橋君が四時間位経てば著くと云ふたのに、五時間経つても八尾島にも近づけない。残暑の烈しいのと日本酒のお蔭で船側枕に二人とも午睡を貪つた。眼を醒して見ると何時の間にか日は暮れたが未だ著かぬ。夫れも其の筈、船足が遅いので向風は稍強くなりおまけに上げ潮になつて来たのである。ジレツたくなつて来たが仕方がない、トウ／＼持つて来たチキンライスの握飯やサンドウィッチで腹を拵らへ日本酒をヒツカけて無聊を消さうと努めたが夫れでも仲々著かない。此夜は空は馬鹿に奇麗で美事な星の世界であつた

僕は生れて此の方此夜位よく空を眺めた事はない。火星、木星、金星など知つたか振りに互に天體論を試みたが外に名論も出なかつた夫ればかりか誰れも北斗星を認めることも出来なかつた。其の内船は錨を下した。一同喜んで早速餌をつけて糸を投げ込んだ、夫れが丁度九時半頃だつた。

船頭は假泊すると直ぐ夕飯を焚き初めた。船頭は其時まで夕飯を喫べなかつた、と云ふのは釜と焚木を僕の船に、米丈けを高橋君の船に別々に積込んだものだ、所が高橋君の船は新造船とて船足早く終始二漣以上の隔りがあつたのでコンなヘマをしたのであつた。

僕等は糸さへ投げ込めば直ぐ釣れるものと早合點して来たのに三十分経つてもチツトも曳かぬ二時間経つても手筈がなかつた三時間経つても餌は其の儘だつた。こんな筈はないと憤慨して見ても仕方がないのでトウ／＼自暴になつて日本酒を大きなコップで三四杯引つかけ、上機嫌で釣つたが一尾も釣れなかつた遂に魂盡きこれはキツト魚もねむたくなつて睡むつたのだらうと青空眺めて眠に就いた。所で僕が持つて来た空氣枕は空氣が洩るので據處なく肘枕で寝込んで了つた。が手が痺れて直ぐ眼が醒めた。處がミスター、モリヒラは酒の勢か大の字なりの大駢、實に百雷の一時に落つる有様、一度醒めた僕はドウしても

【三〇】
睡られない。あまりのイマ／＼しさに鼻の中に紙擦を突つ込んだが仲々起きない。青海原の真中に僅か二艘の小舟何んだか一種云ふ可からざる凄愴の氣に襲はれて二時頃まで寢れない。コンナことならと愚痴までコボした——其の内疲れてトロ／＼眠ると切りに僕の肩を揺り起したものがあつた、眼を醒ますと『君の様に大きな寢言を云はれては眠れなくて堪らない』とミスター、モリヒラが不平を云つて居た。僕は癪に障つてお互様だと逆襲して又酒を呑み交はした時に時計を見ると三時だつたので、オイ睡るよりか釣らうではないかと再び糸を投げ込んだ、普通は二疋のシャユを附けるのを今度は三疋宛附けた。駢と繩言で醒めた魚が曉の月光に餌を見付けたか釣れること夥しい、サア大變眠氣などは何所にか行つてしまつてちつとも睡くない此騒ぎに高橋君も眼を醒まして釣り初めだが是れも亦仲々釣れた。

夜があけるとミスター、モリヒラと僕は小さな島に上陸し岩上に旭を拜しつゝ朝の務を務ました。實に氣持がよかつた。七時頃戒嚴令と高橋君が叫んだ、ソラと許りに皆釣を上げて手網の用意をした。二三分後に上げると鱸でなくて三貫目ばかりの海鰻だつたので一同失望した。ソウする内に今度は僕の方の船頭が引懸けたと云つた、戒嚴令とミスター、モリヒラが頓狂の聲を出した(註、鱸が引懸かると彼地此地荒はれ廻るので互の糸がコンガラガラル虞があるので皆糸を上げる!)と警告するのが即ち戒嚴令、物の五六分も経つたと思ふと馬鹿に大きな奴が船側三四間先きで飛び上つた、而して水中に飛込んだ、實に奇觀だつた。夫

れから二三分して漸く船側まで引き上げた、サア大變大騒ぎ、然し鱸の方でも大變だと思つたか渾身の力を奮つて尾を船側に敲き付けた、其のはづみを喰つて糸は手もなく切れてしまつた。逃げた魚は大きなものと昔から極まつて居るが此の時の位大きなものはないと高橋君が聲明した。

八時頃船頭の作つた朝飯を喫べた臆方捕つた生きた奴をブツ切りにした只の汁だがなかく甘かつた之れからがホントウの鱸釣りと高橋君から嚴命が下つた、一同緊張して餌を無暗に付けて投付込で見たが薩張り釣れない。實に酷い四時間経つても五時間経つても更に釣れない。船頭はコンなに風が出て潮が濁つて来ては到底釣れないと斷言した、然し僕等は今にも釣れる様な氣持で七時間辛抱した此間に面白い喜劇があつた。

元來風浪高い海中漁船で平氣で放射するのは仲々大ケしい變當だ、當日は馬鹿に暑いのと釣れないので無暗矢鱸に日本酒とシトロンを呑んだものだ、所で盛に催ふしても意の如く放射する事が出来ないで閉口して居つた、所が高橋君は流石に經驗家として新聞紙を巻いて望遠鏡型を造り砲身を其間に入れて平氣で放射した、之を見た僕は感心して直ぐ其眞似をしたが望遠鏡の先を餘り空に向け過ぎたので股間に逆射し来たのには一方ならず驚いた。喜んだのはミスターモリヒラ手を拍つて快哉を叫ぶまさか『ゴルフ』の恨を晴らす爲めでもなかつたらうに。クヤシ紛れに君は茶目氣があるので面白いと僕は負惜しみを言つた

七時間釣つても八時間経つても薩張り釣れないのでミスター、モリヒ

ラから場所替への動議を提出したが高橋君は仲々承認しない、先生前の日曜に此所で十數尾を釣つた味を占めたので夕方の六時の潮時迄待てと頑張つた、夫ればかりか今晚此所で釣り明かして明朝一番の汽車で歸るうではないか逆襲して来た。僕等は此んな仙人を相手にしては助らないと三時頃強い追風に帆を上げて月尾島沖に引上げた、此處で小さなものでもウンと釣らうと投げ込んだが二時間過ぎて一尾も釣れなかつた。トウ

今日の日曜とて京城からの汐湯魚釣り客が仲々多く三等客車は

今日の日曜とて京城からの汐湯魚釣り客が仲々多く三等客車は

京城女流俳句

安東貞一郎選

工藤遊鯉子

咲くもよしこぼるゝもよし萩の花
美人の理せの目に立つ残暑かな
雁の聲左遷人のなみだかな
とつ國の人に見に來ませ菊の花

安藤都天子

草むらに幾筋たつや虫の聲
踊り子の小さう輪つくる小庭かな
朝々にとるも樂しき眞桑かな
かけ香や絹つれの音しづかなる
雨の萩傘さよせたくおもひけり

松 本 先 生

加 藤 松 林

少なくとも週に一度は見る顔ですが、さて描かうとすると難かしいもので、刷毛で尺五を塗るやうなわけにゆかないので弱りました。人の顔は皆さうださうだがこれはまた特に定形がない。實によく變る。ところが描かうとしてちつとしておもらふと、それらの活動がびたりと停つて、まるで表情が死んでしまふ。まるつきり別の人のやうだ、大いに困つた。

さて思ふに、先生の顔のいのは活動にあつて、我々が常に受けてゐる印象もそれぞれな特殊な表情に過ぎない。だから先生の顔としてすぐ私が思ひ出すのは將棋でも指してゐる時の大きな口開いて笑ひたほすところであります。實に痛快な顔が出来る。最初はそれを描かうと考へてゐたのだが、スケッチやりだすと少しかたくなられて、それに私とても繪描き商買こそしてゐるものゝ、平常ペンとつて軽い人物スケッチなどやつたこともないので、こつちもいさゝか固くなつて、出来上つたものは表情の死んだ方——だから失敗です。出すのを止さうかと思つたんですが、二三人もやつてゐるうちにはよくならうと、これから毎月つづけるつもりであります。



仲秋節の夜

奉 天 廣 江 澤 次 郎

◇

八月十三日京城雜筆が到着した、先づ以て目錄を拜見に及ぶ孰れも是れお歴々が目白押の豪勢振り結構々々、一瀉千里的に全編通讀する面白いのあれば悲痛なのもある、概して知友の文章が最も印象

深く興味多い、寄稿家連が『永樂俱樂部』でも組織し互に懇意になつて置くと一層京城雜筆も面白く讀まれる様に思ふ、九月號の名文傑作中の秀逸は今村蝶災さんの涼臺話だアノ輕妙晒説、縱横無碍の快筆で藝者の形體美を論じ更に進んで悲痛美、嬌羞美、妖艶美、そして藝術の眞髓を巧妙に説き去り説き來る邊り非凡な粹の神様でなくては出來ぬ藝當であると無暗に感服して居るとボーイが訪客の名刺を持參する。

◇

『朝鮮煙草興業株式會社事務取締役 役岩谷二郎』空腹の時には一息に讀切れぬ様な永い肩書だ、岩谷君は私の親友で天主教の熱心な信者だ、佛蘭西語と支那語は京城で其の右に出る者はあるまい、英語も仲々ウマい、極く地味な道心堅固な人だ。

◇

岩谷君はハルビンで支那人と賣懸金の事で係争問題を惹起して居るが其の談判督促を哈爾濱の佛蘭西領事に一任して置いた、處か丁度事件の衝に當つて居る副領事プロシデユさんが來奉した故、奉天の

中佛實業銀行支配人ザイルターさんと二人を今夜日本の料理店に招待したい、さうして副領事に精々ハルビンで馬力を懸けさせようと云ふのである、料理屋の準備一切宜敷頼む且つ私にも參加應援と云ふご託言だ。

勿論私は粹人でもなければ斯界の猛者でもないが、天主教のチャキ／＼である岩谷君、自分の女房以外は女でないと言ふ解釋してゴ坐る岩谷君よりコウ云ふ場所には融通の利く本願寺の信徒、南無阿彌陀佛の老生の方が笹り役？接件委員長を快話し、ソレ／＼電話で手配済。

◇

奉天隨一の旗亭金六、七番の部屋に陣取つた、前に庭もある小さい池もある東方に面し月も觀られる私は藝者共を呼集めて嚴かに？今晚の一般方略を授ける『お客様は佛蘭西人だから言葉は判るまいが精々惚れた様な顔をしてチャホヤ云ひ踊つたり跳ねたり手を握つたりして悦ばし陽氣に騒ぐ事』藝者共を玄關に網張らせにやり、仲居と共に坐敷の模様を感じのよい様にし電燈の球も大きいのと取替へ床の間に大坐蒲團二つ其の横に吾々の分二つ、設備萬端完了岩谷君も『仲々細かい處迄氣がつく』と悦んで呉れる、紫煙を輪に吹いて顔を撫で珍客を待つ。

◇

七時と云ふ案内に仲々來ない玄

關に手ぐすね引いて待構へて居る藝者共は『お客さんどないしやはつたんだんね』と愚痴る、七時二十分待兼ねた私共は軒頭迄出て左右の街路を眺めた、來た／＼、丁度日本海海戦に舟山列島で假裝巡洋艦信濃丸が露國の東航艦隊を發見した時の様な並び！お客様は二人の筈であるのに是れは驚いた體量二十貫背の高さ五尺五六寸もあらうと云ふ盛裝美人と御同列だ、此の美人はザイルターさんの奥さんである、日本流に云へば料理屋へ山の神携帶は少々恐縮するが來た以上は歡待せねばならぬ、而も西洋では斯る場合山の神を主賓とせねばならぬと聞いて居る、接件委員長技許大狼狽、岩谷君も膽を潰して居る。

◇

奥さんは白耳義生れで仲々の愛嬌美人、副領事さんは頗る嚴格格な紳士、ザイルターさんは氣輕な青年である岩谷君は得意の佛語で應酬を數するが私共には珍紛漢粉薩張り譯が判らぬ、山の神御同列の事として藝者共も一般方略を發揮も出來ず借つて來た猫の様におとなしくして居る、主客互に盃の數は重ねたが坐は段々白けて來る仲々玉山崩れない私も若干焦燥ソレ／＼と許りに藝者共を激勵すれば彼等本性を發揮し陽氣な踊を始めた『奴さんだよ！……奴さんドチラ行く——ハアしたこら』

無暗に活動し出した歌の意味を岩谷君が大難儀して通譯する、踊る程に歌ふ程にお客様三人大満足、日本料理も皆御意に召した、仕舞には奥さんが嬌んに佛蘭西の歌を唄ふ、領事さんもザイルターさんも踊り出すと云ふ騒ぎ、大盛況裡に十時半頃千秋樂！

歸途蒼穹を仰げば仲秋の満月皓として嚴肅を示し冷氣身に沁みだ。

京 城 昔 話

山 口 太 兵 衛



三十萬の府民を擁して膨大なる豫算の下に建設これ努めつゝある京城府は今や内地の大都市と比肩して敢て遜色なきまでに進歩發展せるのであるが、今を距る四十年前の京城、即ち居留民規則制定前後の時代——僅か百人足らずの同胞等が如何に活躍せしかを回顧するとき、誠に悲愴と云はんか將た又滑稽なりと云はんか現代人士の想像だに及ばぬものがあるのである

明治十八年以前の京城には、所謂『雜居條約』が結ばれてなかつた爲めに内地人の居住は許されなかつたのであるが、十八年の初春の頃と記憶する、漸く兩政府の間に京城雜居條約が締結されるに至り仁川より出張所を設くるもの、或は居を移すものがボツ／＼出來たが、此の時代には京城仁川相互間の往復をするにも一々領事の『許可證』を要したもので、仁川から京城へ來るには仁川で手續きを爲して京城へ到着の際『入京届』と云ふものを其都度にした、従つて京城から仁川に行くにも同様の手續きで仁川到着の際は必ず『下仁届』なるものをせねばならぬ事になつて居た、若し此の手續きを怠

る時は廿五錢以上纏らと云ふ、當時のことであるから可なり高い罰金を徴せられる筈になつて居て、而かも中々面倒で頻繁に京仁間の往復をする商人等は尠ならず厄介な事でもあり領事館に於ても一々其の煩に堪へぬ次第であつた。そこで身元タシカなものに限り特別の證明を與へて檢印を受けた、尙ほ亦居留者全部で互撰をして一月代りに總代を選びその總代に去來届書に與書せしめた時代もある亦た京城定住者中から交互に總代を擧げ例の去來届事務を取扱つたこともある、これは居留民規則の制定に依り是非一人の總代を置くことになつた結果である、で、そうなるとその世話に當る人に相當の報酬を與へねばならぬと云ふ問題が起つて種々考へた末に京城在留者は戸別毎に一人毎月拾錢宛の『分頭金』を負擔し、尙ほ仁川から入京するものに對しては其都度届出と共に金拾錢を徴收すると云ふ事にして經費を絞り出し居留民總代に月額五圓の手當を支給する事になつたのである。そして之れが事務所は右の總代の住居を以て之に充てた、當初の總代は林徳兵衛と云ふた——總代の任期は滿一ヶ年とし在留民各戸主(女戸主も

を以て、所謂普通選舉を行つたものであるが、だん／＼と居留民も一人殖へ二人殖へして、總代も只京仁間の往復届の世話だけでは濟まなくなつて來るし一方同年の十二月、領事館から居留民の取締規則の様なものが發布され、茲に愈々正式の居留民會を組織する事になつたのである、而してその居留民會役所と云ふのを今の松翠樓(以前は井門と稱した)の所に定め、此の温突家屋を月四圓の家賃で借入れ、事務所としてそれに書記一名を住はせて總べての事務を取扱つて居た、此の正式總代には市川石動や山本清記などいふ人達が當選した、亦た二十一年の選舉には私が當選したのであるが、其の頃の規約の中に、居留民會總代として其の役を引受ける事も出來ず、それかと云つて、別に適任者もないと云ふ有様であつた、それで否應なしに私にやつて貰はねばならぬと云ふ事であつたので、已むを得ず木下清兵衛を表面の總代とし、實務は私が擔當し、名稱も居留民會總代と云ふ事にした

◇

總代は眞の名譽職で必要のある場合に限り事務所へ出て行けば好いので、重に書記を指揮して萬事の仕事を、やつて居たものである。が後には半日位は出勤して萬事のさばきをした、當時此の居留民會の直ぐ隣室に日本人の商業會議所

が全責任を負つて其の引受代金を

が設けられて之を「商業議會」と稱して居たが其の事務所は月三圓の家賃を支拂ふ温突家屋で、居留民會と同様タツタ一人の書記を住まはせて總べての事務を執らせ外に會頭とか議員とかは同じく選挙を以つて推挙して居たのであつた

さて斯うして役場が二つ並んで出来たが、どちらも書記がたつた一人宛つでは不便だといふので居留民會と商業議會と共同で小使を一人雇ふことにした、斯くて自然に體裁を備へて来るに従つて、一方にはいろ／＼の經費を要する譯で前の分頭金拾錢では何事もする事が出来ないで分頭金を拾五錢に増額し、戸數割賦課金を十錢乃至一圓迄課し、のち別に間口一間につき八錢宛つ、普通の家では同じく一間に就き六錢宛つ徴收する事にして收支を保つて居たが、追々人數が増へるに伴つて相當の施設も必要となり衛生とか消防とか教育の必要も大に感じて来た譯であるが、何をするにも金の出所は別にないのであるから、勢ひ一般の義侠心に訴へ寄附を集めて事を起すより外、道はなかつた。天長節祝賀會や招魂祭を初め臨時のことは皆寄附で行ふた、二十一年に義勇消防を組織するに就いても一般の有志から寄附金を集める事として先づ道具としては舊式の龍吐水と稱する唧筒一臺と蓋口其他一切の附屬品を第一銀行を介して大阪に注文した、此の金が全部で三百五六十圓——それだけ必要な所に寄附金の方はタツタ百五六拾圓しか集まらぬ——これには腸つて居ると、其の寄附金を扱つて居た男がありつた金の金を自分で使用し東京に行つて了つて始末のつけやう

がない、其の内大阪からは第一銀行宛に唧筒が到着する、民會として金は一厘もないので、遂々私

京城みやび會詠草

坪内 孝 選

- 初 秋 工藤 武城
衣うつ砧の響きより秋は來ぬらし風のそよぎに
- 同 平野 迂禪
うらぶれのこの身の儘石の上に秋たつ今日を何思はなむ
- 同 江頭まつ子
汗しつゝ坂を登れば北うけの山は早くもみぢしにけり
- 同 山田 花江
かや原のたれ葉に風の訪れて葉ゆれかそけき初秋の野邊
- 同 池田 照子
初秋の夜を窓べに佇めば虫啼きやみて星はとぶなり
- 同 加藤 勝子
去年來にしこの道のへに咲き残る野菊みだれてなつかしき哉
- 同 工藤 ゆり子
いつしかに秋たちぬらし朝な夕な袖ふく風のヤゝに涼しき
- 同 小松 久子
千代八千代かくてありなむ劔太刀鞘におさめて世を渡るべく
- 同 工藤 ゆり子
そこ知れぬ淵にのぞみし心地して夏なほさむき劔の光
- 同 江頭まつ子
この宮のみたまと仰ぐ御劔よしつまりまして幾代經にけむ
- 同 平野 迂禪
天さかる神の御魂をやとらせて國をしつめの劔かしこき
- 同 工藤 武城
日の本の世々の寶ぞ草薙の劔はしこの草をなぐべき
- 同 松寺 桂陵
劔太刀よし劔をたちぬとも鞘の儘にぞ置くがゆかしき
- 同 加藤 松子
今はたよ飾りおきたし御劔もそのかみ語るいさほしゆかし

生活断片

永樂町人

【100】

その光輝は、黄洋として居る。
——我れを去る遠し、世の終りに
あらずや——といふやうな氣持が
する。

◇ 私達は、わかい頃は、季節の推移
自然界の事物の流轉といふやうな
ことは、殆ど關心しない。

精力旺盛にして、傍目もふらず進
んで居る。

だが四十前後になると、血氣漸く
沈潜し、注意力も四圍に注がれて
さして凝視するでもないが、一事
一物の變化が——流轉が、まざま
ざと眼に映つるやうに思ふ。

◇ 有爲轉變の感が深い。

萬法流轉の思ひが痛實だ。

だが亦たそれだけ、生命や四圍に
對する愛著も深くなる。

眞に生存の喜びが味はれる。

◇ 私達の年輩は、今漸く此の門に
一消程に、這入つて來たやうに思
ふ。

◆森さんの句

町人記

今村さんから下手將棋の句を頂いた
いた翌々日、殖銀に行つて、森さ
んにこの話をする、返句の代作を
頼みたためだ、とそこは宗匠た
ニヤ／＼笑ひ乍ら直ぐペンを執つ
て、書きつけたのが下の句だ、で
早速今村さんに一矢報いたが、あ
とで考へて見ると、『金銀を缺ぎ
て』云々とは、甚だ情けない、こ
ゝは何とか名文句はないものかナ
ア……。

金銀を缺ぎて將棋の膝裏し

◇ 私の小さい書齋は、それでも南面
して居るので、朝な夕な太陽が
訪づれる。

◇ 私は、その様の上で、毎朝、日中
ぼつこをするに居る。
その朝配達された新聞や書簡は、
大底そこで讀了するのである。

◇ 快晴の日だと、背中があつくなり
驚いて部屋に、退却することもあ
る。

◇ 寢ころんで、足など出して居ると
灸でもすえらるゝやうに感じ、あ
わて、居すまゐを直すこともある。

◇ この頃、子供が病後なので、日光
浴をやらせて居るが、物の十四五
分もすると、汗を流し、呼吸をは
づませて、苦痛を訴へる。

◇ 斯うした経験に日々直面して居る
と、如何に無關心な自分も、太陽
の威力といふものを、しみ／＼感
悟せずには居られない。

◇ 折々竹添町あたりの、場末を散歩
することがある。

◇ 誰れの住居か知らぬが、コスモス
が今方に秋晴に咲き誇つて居る。
私は、輓近西洋花が著しい厭倒力
で、日本在來の草花を壓伏し、極
東の全原野を——園庭を、占有し
つゝあるのを思ふ。やがて日本種
は、犬や牛や馬と共に、絶種する

時があるであらう。
と同時に、太陽の一氣の力が、此
の美妙の草花類を、開花させる不
思議の力を思ふ。

◇ それは、堯舜の大聖でも、米の一
粒だに、創造する力はなからう。
太陽のみ生命を與へる、太陽のみ
創造する。
私は彼れを贅美せずには居られな
い。

◇ 私の部屋には、夏は光線は侵透し
ない。
是れは太陽の位置が、我々の頭上
にあるが爲めである。

◇ が段々秋口に向ふと、光線は、一
寸刻み——二寸刻みに、侵透して
來る。
是れは太陽の位置——出所が、段
々南方に轉じ、斜めに我々の家居
を窺ふことになるからである。

◇ 現在私の部屋には、四五尺位光線
が、明るい隈を描いて居る。
そして太陽の位置を観ると、眞夏
に、我々の直上にあつたものが、
いつしか遠く（日中でも）南天に
ぶつて居る。

◇ 私は最も冬の太陽を、感慨深く眺
めるものである。
それは南々東の地平から出、底く
地面を這ふやうにして、五時前後
には早くも地平に没する。
晝の時間はいくばくもない。

編輯後記

吉田 壯一

◎秋は朝鮮としては、一年中の好季節である。

◎あの太陽の美しさを觀よ、あの大氣の清澄さを觀よ、鴻雁は雨に飛び、野菊は到る所の離落に咲く松茸の市に出るのも、此の頃であり、平壤樂の世に出るのも、此の頃である。登山、遊獵、垂綸、一として此の季節の行事でないはない。

◎秋は亦た夜間が好き、月ある夜半は、到底窓を閉つることは出来ない、白露がおりる、虫聲があがる、詩の世界、歌の場面である。それから温度は、火鉢あるもよく火鉢なきも亦たよく、何となくしみくとして人なつこい。

◎古人が秋を讀書の季とし、亦た執筆の季としたのは、全然同感せられることである、記者は寄稿家の此の季節の收穫が、來る十一月號に發揚することを、待つものである。

◎それは『わが好める古書』に就て語られても面白いし、『わが愛誦詩、愛誦歌』に就て説かれても面白いし、更に『わが郷土の忘られぬ俗謠』に就て、物語られても妙である。どうか修飾せず、むき出しに書いて貰いたいものである◎亦た『怪談』は、この頃の流行で、一向罪がなく、甚だ面白いと思ふ、自ら經驗せられたことなら最も結構——曾て聞いた中で最も凄いと感じられたものでも好い、秋の夜長のつれづれに讀者の一餐に供したいと思ふ。原稿はやはり

二十日以前に投函せられたい—
行數は百十行（十五字詰）以内。

いろいろ話

平田 久雄

◎本誌寄稿家今村燦炎氏は、時々いたづらを遣つて、手を叩いて喜ぶといふ頗る罪業の深い先輩である。この間も本社永樂町人に、一書を寄せられたから、うやくしく開封に及ぶと、

『下手將棋王逃げ抜けて夜は長からむ』

ウーンといつて、二の句がつけない——目下復讐軍に就て、凝議中である。

◎本誌に對して絶大の好意を有つて居られた丸山前警務局長の退辭はまことに有名残り惜い次第である。併し同氏は『しばらく浪人するから閉は出来る、原稿は東京からドシ／＼送る』といつて去られた——記者はせめてさうあらうことを念じてやまないものである。

◎本號に滿鐵佐藤さんの『金剛山漫筆』を載せた、近來稀觀の名文字である、皆さんの必讀をお勧めする。いつも滿鐵から原稿をお勧めする。いつも滿鐵から原稿をお勧めする。若曾彌さんの御翰旋を煩はす、今度もさうである、記して御好意を深謝する。

◎加藤松林君が、永樂町人の素描をなし、之を本號に載せるといふので、半日モデルにされた——但し印刷に間に合ふや否や、今のところ不明である。

◎工藤（武城）さん、徳野（眞士）さん、堀内（滿輔）さんなどから本誌寄稿家の懇親會を開催してはとの提議があつた、近々機を見て實行のつもりで居る。その時は

どうか萬障御繰合せ御出席を望む

大正十三年十月八日印刷
大正十三年十月十日發行

一部定價金四十五錢

京城府和泉町一六四

發行兼 松本 武正

編輯人 前原 登久雄

印刷所 京城日報社

京城府和泉町一六四

發行所 京城雜筆社

電話光化門三〇六番

廣 告

辯護士 榎本 隆

京城明治町二

細工の
御用は
本町
徳力へ
電本三九三九

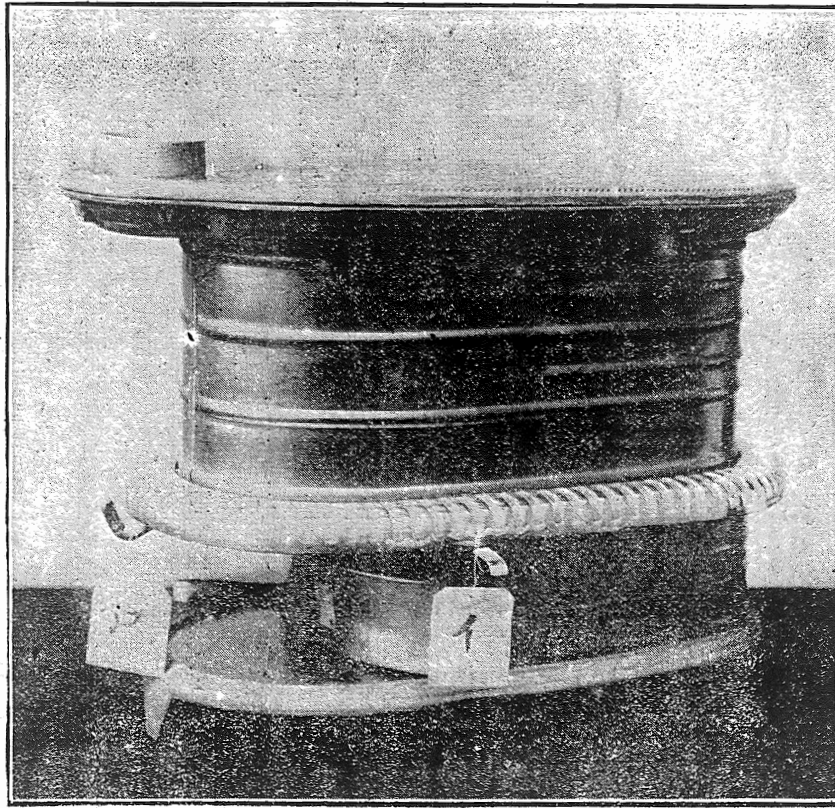
全銀全
地金御用ハ
京城明治町
徳力平信出張所
電本二〇八八
電本一五七二

京 徳 城

何でも改造文化生活の高潮さるゝ現代に
 生れたる革命的暖房器!! 何??
 富永式特許ストーブ

五大特色

- 一、燃料の一大節約
- 一、灰の塵飛散の患なし
- 一、火災を起すの慮れなし
- 一、煙突掃除は繰返すの要無し



大サ } 高さ 一尺一寸
 大サ } 縦巾 一尺一寸
 大サ } 横巾 一尺一寸

定價 } 二ノ號 拾七圓 (寫眞の通)
 定價 } 一ノ號 拾貳圓 拾五錢

特長は誇張のない所を擧げて居ます昨多より御試用を願つた各方面の名
 士より此特長を裏書された御批評も頂いて居ますが余白の都合で乍遺憾
 掲載出来ません兎に角本町御散策の御序に現物御覧を願上ます

特約店
 京橋本町一丁目 金物店
 電話本局四二番
 同 二丁目 青々園茶舗
 電話本局二二二番
 同 一丁目 特許暖爐組合假事務所
 電話本局一三四番

端書で御申込次第型録お送りいたします

專賣特許第九三五九號

大學式 最新式 萬年
ハートマン

本品ノ構造完備ト
正確ヲ保證スル爲
メ一ケ年以內ニ破
損ノ節ハ直ニ返金
致シマス

闇夜で使用しても絶対にインキのコボレナイ
然も完全で使用簡單、夫れで耐久力に富んで値
段が安い、が本品の特長であります



函上エポイナト軸 三分八厘丸金 四圓〇〇錢
正十四金ペン先付 三分五厘丸金 三圓五十錢

本萬年筆は繰出、押出、振出の必要なく又爪開けの如くインキが飛んだり他の萬年筆の様に
インキが出過ぎたり落ちたりする憂が絶対にありません只使用に當りて右萬年筆付號(ロ)の
處を左に捻つて次に(ハ)の凸部を押せば、インキはペン先に適當に出て來ます然して(ハ)凸
部を如何に押しても使用に充分なる以外のインキは吸入され絶対にインキの落ちないのが不思議
です尙使用後は(ロ)部を元の如く締めて置けば(ハ)の凸部を何回押してもインキは絶対に
出ません(イ)の部は捻子を戻してインキを入れるのです

京城府太平通り壹丁目(美術品製作所前)

萬年筆製造
並ニ修理

商 萬年筆大學病院

電話光化門一五七七番

△京城の各萬年筆商にて販賣す▽

官製食卓鹽

朝鮮總督府專賣局製造の本品は理想的經濟的の調味料で文化的に缺くべからざるものであります
 德用大瓶小瓶出瓶等數種の美しい瓶入で價格低廉です是非御使用願ひます

京城府南大門通二丁目九八

發賣元 富田商會

長電話本局三三〇九番
 振替京城四五六八番

秋物背廣服
 同オーバ
 レインコート

新地質續々着荷

仕立念入り價格は安い

經濟的理想の既製品頗る豊富

▲御注文に應じ特製仕候
 京城 鍾路 一ノ一九

角田洋服店

電話光化門九五五番
 振替京城一八四三番

▲京城雜筆誌▼を通じて

本紙愛讀者の奥様方へ御挨拶を申上ます

定評

▲紺屋のあさつて▼

古へからある言葉です、あさつてじゆうにやります、と受負つた仕事も其日に雨がざあーと、降れば、店の方では天災で出来ませんと云ひ、御客様は、うそつきだと申されます、天災以外で出来た事迄天災だと、平氣である事はよくありません、改めねばならぬ事です。

京 城 本 町 三 丁 目

京 染 榮 志 ら ぎ 屋

電話本局三〇六八番

▲高級新柄見本が揃ひました▼

京 城 太 平 通 二 ノ 二

金 川 食 堂

同 太 平 通 一 ノ 二

車 帳 場 金 川 組

電話本局二二八四番

主 馬 木 勇 吉

丈夫て向上靴
スタイルのよい

『正しき製作』を信條とし 材料を吟味精撰して丁
寧親切に作られたるもの、是非御試み給はん事を

◎紳士向◎學生向◎女學生向

豊富品揃居申候

京城南大門通

向上會館靴
一手販賣店

株式會社

丁子屋洋服店

電話本局
長二二六四
三〇九二番

休日なし 毎日夜九時迄營業 — 御用の節は店内クツ部御呼出被下度候

京 城 永 樂 町 二 丁 目

教 育 普 成 株 式 社 會

(電 話 本 局 一 九 四 八 番) (振 替 京 城 四 六 二 七 番)

京城舊龍山元町一丁目

大陸護謨工業株式會社

實務取締役 岩間 亮

朝鮮郵船株式會社

京城府光化門通り

京城手形交換組合銀行

京城吉野町一丁目

內科
小兒科
木村醫院

電話本局七二五番

◎銘仙と

毛糸◎



京城本町
あゝぬや

堀内満輔

電話本局
八五五
九〇〇
〇六五
番番番

◎多少に拘らず御用命

の程を願ひ上げます

金子剛山の産松の實應用菓子

金剛でんぶ
金剛このわた
金剛うに
金剛しるこ
金剛おこし
金剛羊羹
金剛煎餅
金剛饅頭
金山
金剛飴

電話本局二七五番

龜屋本店

京二城本町

◎銘仙と

毛糸◎



京城本町
ちんぼや

堀内満輔

電話本局
八五五
九〇〇
〇六五
番番番

◎多少に拘らず御用命

の程を願ひ上げます

金子剛山の産松の實應用菓子

金	金	金	金	金	金	金	金	金	金
剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛
で	この	う	し	お	羊	煎	饅	剛	剛
ん	の	に	る	こ	羹	餅	頭	山	飴
ぶ	わた		こ	し					

電話本局二七番
番五七四

店本屋龜

町目本城京二

清新氣

各部ニ横溢セル

輪界三大絶品



遞信局専用車



プリミヤ

自轉車

優美實用堅牢車

アイリス

自轉車

耐久無比價格至廉

ダンロップ

タイヤ



進型錄

元賣發

株式會社 丸石商會

東京・大阪・横濱・福岡・京城・倫敦

◀ 各 地 有 名 自 轉 車 店 = テ 販 賣 ▶